



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アンドリュー・ユーア 『製造業の原理』 とマルクス : マルクス 「機械論」 形成史研究 (1)
Author(s)	吉田, 文和
Citation	北海道大學 經濟學研究, 31(5), 53-116
Issue Date	1982-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32435
Type	departmental bulletin paper
File Information	3.pdf



アンドリュー・ユーア『製造業の原理』とマルクス

——マルクス「機械論」形成史研究(1)——

吉 田 文 和

目 次

はじめに

- I アンドリュー・ユーアの生涯と著作活動
- II 『製造業の原理』の出版目的と内容構成
- III 第1巻第1章「製造工業の概観」の分析
- IV 第1巻第2章「製造業の配列と関連」の分析
- V 第3巻「工場制度の道徳的経済論」の分析
- VI 総 括

は じ め に

アンドリュー・ユーアといえば、『資本論』でたびたび引用・批判されている『製造業の原理』(『工場の哲学』)の著者として、その名が想起されるであろう。しかし、ユーアの生涯や著作活動の全体、そして『製造業の原理』そのものの全体像については必ずしも十分明らかにされているわけではない。『人名辞典』をひもとくと、ユーアは本来化学者であって、化学者の彼がなぜ『製造業の原理』を書いたのか、当然疑問が生まれてくる。そして、彼が生きた時代の産業革命と、彼とのかかわりについても関心がもたれるのである。

最近のユーア研究は、イギリス本国において本格的なものがあられている。一つは、W. S. C. コープマン「アンドリュー・ユーア、医学博士、英国学士院会員 (1778~1857)」¹⁾であって、医学者、化学者としてのユーアの経歴と著作活動を概観している。二つは、W. V. ファラーの「アンドリュー・ユーア (英国学士院会員) と製造業の原理」²⁾で、これまでの一番詳細な調査・研究となっており、ユーアの生涯・著作活動を全てあつかい、さらに『製造業の原理』を分析している。こうした研究は、わが国においてほとんど紹介、

検討されることなく、「独自に」ユーア研究が行なわれてきた。³⁾

たとえば、ユーアの経歴についての、仲村政文氏の紹介によれば、⁴⁾ユーアは、1804—1830年：グラスゴウ大学の化学・物理学教授、1809—1830年：グラスゴウ大学で天文学者、1840—1857年：ロンドンで薬剤業、を開業となっている。しかし正しくは、1804—1830年：アンダーソン専門学校の自然哲学教授、1808—1830年：グラスゴウ天文台の天文学者、1830—1857年：ロンドンで化学コンサルタントとすべきものである。仲村氏の紹介は、マルクス『経済学批判要綱』の人名索引⁵⁾の一部分不正確な記述がさらに一部誤訳されたものを、誤記・引用した結果である。こうしたことはささいなことにみえるかもしれない。けれどもユーアの生涯や著作活動の概観によって、彼が『製造業の原理』を書いた背景や意図・目的を明らかにする作業がやはり十分に行なわれていない証左であるようにおもわれるのである。

また、『製造業の原理』そのものの全体像についても、これまでの研究は十分明らかにしているわけではない。とくに、最近、マルクスのいわゆる『機械論草稿』（1861～1863年の『経済学批判』）の公表によって、これまで考えられていた以上に、マルクスによるユーア『製造業の原理』の検討・批判が広範囲にわたることが明らかになっているとき、『製造業の原理』の内容を全面的に紹介・検討することが求められているといえよう。そこで本稿では、①はじめに、ユーアの生涯と著作活動の全体を概観し、②『製造業の原理』の成立と背景を明らかにし、③『製造業の原理』の主要内容を紹介・分析し、④あわせて、マルクスが『製造業の原理』をいかに批判・摂取したかを明らかにしようとするものである。

注

- 1) W. S. C. Copeman, "Andrew Ure, M. D., F. R. S. (1778-1857)," *Proceedings of the Royal Society of Medicine*, Vol. 44, No. 8, August 1951, pp. 655-662.
- 2) W. V. Farrar, "Andrew Ure, F. R. S., and the Philosophy of Manufactures," *Notes and Records of the Royal Society of London*, Vol. 27, 1972/1973, pp. 299-324.
- 3) ユーアについての邦語論文は、管見のかぎり以下のとおりである。①『経済学説体系

(10)社会政策論』高島素之，安倍浩訳第一編「ユア」而立社，1924年。②戸田武雄『増補，機械の経済学』第8章，刀江書院，1936年。③上林貞治郎，井上清『工業の経済理論』〔増訂版〕第5章第1節「ユアの工場制度論」，ミネルヴァ書房，1968年。④仲村政文「マルクス生産力論の一源泉——A・ユアの所説について——」鹿児島大学『経済学研究』第3号，1968年，のちに同『分業と生産力の理論』青木書店，1979年所収。⑤橋 博「A・ユアの工場生産論について」大阪市立大学『経営研究』第104，105，106合併号，1970年，のちに同『工場経営と作業分析』ミネルヴァ書房，1970年所収。⑥後藤邦夫「資本主義の工業化とプロレタリアート」『現代の理論』1972年1月号。⑦同「制御技術と人間・機械系について」『経済セミナー』1973年7月号。⑧吉田文和「A・ユア『工場の哲学』と『資本論』」『経済科学通信』1973年秋季号。⑨茂木一之「分業論と『管理論』との初期的系譜——スミス・バベッジ・ユアを中心として——」『高崎経済大学論集』第18巻第4号，1976年。⑩植村邦彦「ユアにおける分業と機械——〈資本の生産力〉認識の形成(2)——」『一橋研究』第4巻第3号，1979年。

4) 仲村政文，前掲書，61ページ。

5) *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* (1857-1858), Namenregister, Berlin, Dietz Verlag, 1953, S. 1092, 『経済学批判要綱』大月書店 1965年, 1350ページ。

I. アンドリュー・ユアの生涯と著作活動

アンドリュー・ユアは，1778年5月18日，スコットランドのグラスゴウでチーズ屋の息子として生まれた。グラスゴウ大学とエディンバラ大学に学び，1801年グラスゴウ大学を卒業し，¹⁾医学博士となった。卒業後，スコットランドの北部で陸軍の軍医をつとめた。1804年，グラスゴウ卿の後援によって，28歳の若さで，アンダーソン専門学校 (Andersonian Institution) の自然哲学の教授にえられた。同校は，グラスゴウ大学で東洋語と自然哲学を教えていた J. アンダーソン (John Anderson, 1726-1796) の遺言で，その博物館，図書館，科学器械の提供によって創立されたものである。

イングランドと異なる宗教・文化・教育体系をもつスコットランドは，実用学を重視し，比較的，開放的な教育体系をもっていた。そして，産業革命期の著名な技術者を多く輩出していた。²⁾アンダーソンは，熱烈な民主主義者で，フランス革命に共鳴した。そして，J. ワットに自分の蔵書を自由に使わせた。³⁾また，労働者たちに仕事着のままで自分の講義に出ることを許した。

アンダーソン専門学校の自然哲学の教授職は1799年につくられ、ユーアは前任者の G. バークベーク (George Birkbeck, 1776-1841) をひきついで、職工に対する夕方の講義を行なって成功させた⁴⁾。給料は支払われず、授業料だけが報酬であった。ユーアは若い時代にはよく働いて、講義をうまく行なった。ユーアは実験つきの化学や機械学の講義で人気を博し、多くて五百人、通常三百人が聴講した。ユーアは、職工階級の道徳に対する授業の効果を期待していた⁵⁾。学生のなかには、鉄工場主の J. B. ネイルソン (James Beaumont Neilson, 1792-1865)、化学技師の J. ヤング (James Young, 1811-1883)、のちの化学者、プレイフェア卿 (Lyon Playfair, 1818-1898)、その他多くの繊維企業家がふくまれていた⁶⁾。

ユーアの講義についての、フランスのシャルル・デュバン (Charles Dupin, 1784-1873) の公式報告⁷⁾によって、パリの工芸学校 (École des Arts et Métiers) に同じようなコースがつくられている⁸⁾。さて、ユーアはグラスゴウ天文台の設立に参加し、1808年台長 (Director) になった。天文学について講義を行なったけれども、深いものではなく、地方の風刺家の対象となった⁹⁾。しかし他方で、ユーアを評価する記事も出ている。それによれば、ユーアは英国の主な製造所と鉱山、職人の仕事場、化学実験室を訪れて、広く最新の知識を得て、学生に教えているとしている¹⁰⁾。1816年の夏、ユーアはフランスアカデミーの招待で、フランスへ旅行した。この旅でフランスの化学者の間に伝統的にはぐくまれてきた、化学を産業へ応用する努力に接し、強くその影響を受けた¹¹⁾。これより先、ユーアはアイルランドの亜麻布委員会でコンサルタントとして働き、アルカリメーターをつくった。これが産業コンサルタントとしての仕事の最初であった¹²⁾。

科学を技術と産業へ利用するという彼の多大な関心は、『化学辞典』¹³⁾ (1821年) に結実した。この仕事は、もともと W. ニコルソン (William Nicholson, 1753-1815) の『化学辞典』の改訂として出版者の求めによってひきうけられた。しかし、ユーアはほとんどそれを書きかえた。この本は、1824年、1828年、1835年と版を重ね、ドイツ語版、フランス語版も出された。こうした化

学者としての仕事のみとめられて、1822年英国学士院の会員にえらばれた。¹⁴⁾ さきの『化学辞典』は、さらに視野を広げて、『技術、製造業、鉱業辞典』¹⁵⁾ (1839年) となった。この『辞典』は7版を重ね、またドイツ語版も出された。産業革命期の産業技術、とりわけ化学関連技術の実態を示す最良のものであって、のちに詳しく検討したい。

大学外部での諸活動の結果、ユーアの講義は手うすとなった。また社会情勢も工場主と労働者との対立がひろがりはじめ、機械監視者としての非熟練工の大量採用と熟練職人の衰退の時期でもあった。¹⁶⁾ ユーアの講義における誇張や皮肉への批判も生まれ、学生の道徳向上のためという、おしきせがましい態度は反感をかった。こうして、1823年7月には、ユーアの講義をめぐって騒動がおき、¹⁷⁾ 機械工クラスがアンダーソン専門学校から分離した。1829年、ユーアは、学校管理者と対立し、アンダーソン専門学校での地位は不安定となった。同年、ユーアは『地質学の新体系』¹⁸⁾ を出版した。これは、創造主についてのモーゼの記述と当時の地質学的発見とを調和させようとする時代おくれの試みであった。ユーアは、地質学者が宗教と道徳の基礎を傷つけていると考えた。この本は、1830年の地質学会で、専門の地質学者、A. セジウィック (Adam Sedgwick, 1785-1873) によって徹底的に批判された。ユーアは時代にあわせることができず、多くの誤りがくりかえされた。しかも引用符号なしに、他の著作から多くの部分を抜粋していた。¹⁹⁾

ユーアが『地質学の新体系』に力を注いでいる間に、アンダーソン専門学校での事態は最悪となっていた。そしてついに、1830年5月25日、自然哲学の教授を辞職してその年ロンドンへ移った。²⁰⁾ ロンドンでは、鉱物水と鉱石の分析を行なう化学コンサルタントとして生活した。コンサルトの範囲は、次第に科学全体にわたるようになっていった。この種のものとしては、おそらくイギリスで最初であった。コンサルトの料金は決して安くはなかった。また法廷で証言を行ない、コンサルトの内容をつぎつぎに出版していった。物理学・化学関係だけで35種ものパンフレットになっている。²¹⁾ コンサルタントとなつてからは、かつて彼の学生であった産業家の工場を多く訪れた。²²⁾ そし

て、彼自身、バイメタルのサーモスタットの特許をとったり（サーモスタットという命名はユーアに帰せられる²³⁾）、建物の通気について、ファンによる強制通気の方法を提唱した²⁴⁾。

1833 年、枢密院は砂糖税の税率を確定するために砂糖精製の大規模な実験をユーアに依頼した。ユーアはこの仕事で 800 ポンドをもらったが、健康を害した。その回復のため、1834 年秋、ランカシャー、チェシャー、ダービーシャーの製造業地方を旅行した。これが『製造業の原理』²⁵⁾ (1835 年) の基礎となったのである。この本は、もともと多くの産業をあつかう一連のシリーズの序巻として計画されていたけれども、そのシリーズは、綿業についてのみ、『英国綿工業論』²⁶⁾ (1836 年) として出版された。これより先 1834 年、ユーアは非公式の税関の分析化学者となり、この税関の仕事によって、彼は最初の「政府の化学者」となったのである。こうして、議会の各種委員会で証言を求められるようになっていく。

たとえば、1843 年に下院煤煙防止特別委員会で、大都市における炉または蒸気機関からの煤煙を防止する問題について証言を行なっている。ユーアは煤煙防止は可能であり、製造業者にそれを義務づけることが適当としている。しかし規制を工場から民家に広げることには反対している²⁸⁾。この他 1850 年には都市下水道委員会に対して、マラリア防止対策について報告書を提出している²⁹⁾。

こうして晩年をすごしたユーアは 1857 年 1 月 2 日、ロンドンでなくなった。そしてロンドンのハイゲート墓地に葬られた。ここは、のちにマルクスの墓地となったところでもある³⁰⁾。

注

- 1) *The Dictionary of National Biography*, Vol. XX, London, Oxford U. P. (1921-1922), p. 40.
- 2) 北 政巳「工学大学校とグラスゴウ大学」『社会経済史学』第 46 巻第 5 号, 1981 年, 3~4 ページ。
- 3) J. G. Crowther, *Scientists of the Industrial Revolution* (London, The Cresset Press, 1962) p. 119. 加藤鉦治「英国 Mechanics' Institute の起源」

- 『名古屋大学教育学部紀要』第20巻, 1973年参照。
- 4) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 300. ユアの行なった講義は, ①物理学原理, ②化学の生産への利用, ③機械学基礎, であった。A. H. Sexton, *The First Technical College* (London, Chapman and Hall, 1894) p. 28.
 - 5) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 301.
 - 6) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 313. A. E. Musson and E. Robinson, *Science and Technology in the Industrial Revolution* (Manchester U. P. 1969) p. 182.
 - 7) *Voyages dans la Grande Bretagne*...3 Vol. Paris. 1820-1824.
 - 8) *The Dictionary of National Biography*, Vol. XX, p. 40.
 - 9) W. V. Farrar, *op. cit.*, 301-302.
 - 10) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 303.
 - 11) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 304.
 - 12) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 304.
 - 13) *Dictionary of Chemistry; on the basis of Mr. Nicholson's*, London, 1821.
 - 14) *Dictionary of Scientific Biography*, Vol. XIII, by E. L. Scott (New York, Charles Scribner's Sons, 1976) p. 574.
 - 15) *A Dictionary of Arts, Manufactures and Mines; containing a clear exposition of their principles and practice* (London, Longman, 1839).
 - 16) W. S. C. Copeman, *op. cit.*, p. 658.
 - 17) W. V. Farrar, *op. cit.*, pp. 308-311. B. Simon, *Studies in the History of Education 1780-1870*, (London, Lawrence & Wishart, 1960) p. 216. 成田克矢訳『イギリス教育史1』亜紀書房, 1977年, 254ページ。
 - 18) *A New System of Geology, in which the great revolutions of the earth and animated nature are reconciled at once to modern science and sacred history*, London, 1829.
 - 19) *Dictionary of Scientific Biography*, Vol. XIII, p. 547.
 - 20) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 314.
 - 21) *The Dictionary of National Biography*, Vol. XX, p. 41.
 - 22) W. S. C. Copeman, *op. cit.*, p. 660.
 - 23) A. R. J. Ramsey, "The Thermostat or Heat Governor, An Outline of its History," *Transactions of the Newcomen Society*, Vol. XXV, 1945-1946, 1946-1947, p. 55.
 - 24) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 315.
 - 25) *The Philosophy of Manufactures: or an Exposition of the Scientific, Moral, and Commercial Economy of the Factory System of Great Britain* (London, Charles Knight, 1835).

- 26) *The Cotton Manufacture of Great Britain, systematically investigated and illustrated*: 2 Vol. London, 1836.
- 27) *Report from the Select Committee on Smoke Prevention; by The House of Commons, Minutes of Evidence*, 17 August 1843, p. 8.
- 28) *Ibid.*, p. 15, 187.
- 29) W. S. C. Copeman, *op. cit.*, p. 662.
- 30) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 320.

II. 『製造業の原理』の出版目的と内容構成

(1) 『製造業の原理』の出版目的——『製造業の原理』序文の分析——

「現在は、技術 (arts) と製造業に対する企業の全般的な熱意によって、以前のどの時代とも区別される」(p. vii) という書き出しではじまる『製造業の原理』序文は、本書出版の目的と経過を自ら明らかにしている。「戦争はいつも割にあわない(全ての関係者にとって滅亡の競技である——フランス語版、以下カッコ内はフランス語版)ということをやっと信じるようになった諸国民は、その剣と銃を、工場用具にかえ、今では無血であるが、恐ろしい商業戦を互いにたたかっている」(p. vii) という時代認識のもとに、大ブリテンの製造業における優位性を保持し続けるには、「大ブリテンはその生産にたずさわる全ての身分の人々に徳育と職業上の訓練を、精出して奨励しなければならない」(p. vii) と強調する。そのためには、「『製造業の原理』が正確に分析され」(p. vii) ることが求められ、「我々の有用な技術の各々の部分は、その研究を容易にするために、またその不十分さを指摘し、それを正す最も有望な手段を示唆するため、ガイドブックを必要としている」(p. vii)。ひきつづいて、ユーアは、本書出版の経過をこうのべている。

「私は、四半世紀学校に勤めて、若い人々や實際家に、機械学と化学を技術に応用することを説明してきた。著者は、それらの原理と(それが実際に使用される——フランス語版のみ)過程との体系的な説明(詳細)の公刊を準備することが義務であると感じた。このことは生徒たちによって常々要望され(くりかえしすすめられ)ており、この生徒たちは、今や(工場の所有者や経営者として——フランス語版なし)王国中に広がっている。この目的から、著者は、りっぱに仕事を果せるように、新しく大きな製造業(施設——フランス語版なし)のいくつかに自由に入出入りし、観察を行

なうことを決心した」(p. viii)。

ついで、ユーアは出版の遅れについて弁明し、工場地域への旅行で「工場主から最高の親切と自由を経験させてもらった（最高の気前のよい、歓迎のもてなしをうけた）」(p. ix) ことが、本書の基礎となっていることを明らかにしている。本文で、本書の出版目的を直接語っている部分は、大別して、①工場法に関係して、イギリスにおける工場制度の重要性をのべ、工場に対する「偏見」をただし、労働組合と工場法の規制とを批判する、②若い人々や製造業の関係者に、工場と製造業に関する一般的知識を提供する、の二つの目的がみてとれる(p. 6, 7, 43, 334)。

当時のイギリス国内の情勢は、1832年にトーリー党のサドラー報告が、国内に奴隷制があるとし、1833年に王立委員会がサドラー報告を確認のうえ、1833年の工場法を通過させた。議会は地主勢力も多く、一方で労働者の運動が激しくなるなかで、トーリー党の「人道主義者」が工場制度への規制を主張していた。¹⁾ユーア自身、1823年、アンダーソン専門学校で機械工に攻撃され、また長年、製造業の工場主との交流のなかで、ユーアの立場は当然工場主を擁護するところとなった。²⁾

(2) 『製造業の原理』の内容構成

『製造業の原理——大ブリテンの工場制度の科学的、道徳的、商業的経済の説明——』は、全体で4巻からなっている。第1巻「製造業の一般的原理」は第1章「製造工業の概観」(pp. 1-54)、第2章「製造業の配列(分類)と関連」(pp. 55-66)、第3章「工場制度の地誌と統計」(pp. 67-80)をふくんでいる。第1章は、全巻の序論であって、綿工場を典型とした自動機械体系の分析を中心としている。これまで一番よく注目され紹介されてきた部分で、マルクスによる引用も集中している。第2章は、機械的技術と化学的技術の区別と各々の分類が行なわれている。第3章は、表題どおり、工場制度の地域別分布とその統計が示されている。第2巻「工場制度の科学的経済論」は、各種の繊維製造業、工場をくわしく解説しているが、叙述は専門的で、翌年に『英国綿工業論』としていっそう詳細な研究が出版されている。第3巻「工

場制度（自動体系）の道徳的経済論」は、第1章「他の労働者階級にくらべての、工場職工の個人的快適さについて、または工場が提供できる娯楽の手段と対照して考察される工場労働の量と質。この問題についての不満、偏見、立法の歴史」(pp. 277-373)、第3章「工場居住者の健康（工場の衛生状態）」(pp. 374-403)、第3章「工場における知識（教育）と宗教の状態」(pp. 404-429)からなっており、工場法をめぐる諸問題をあつかっている。第4巻「工場制度の商業経済論」(pp. 430-466)は、商業、資本、信用をあつかい、とくに自由貿易論を中心に展開している。

以上の4巻構成は、ユーアなりの製造業についての体系的考察にもとづいている。第1巻第2章の冒頭でつぎのようにのべている。

「……製造業は全て機能の三つの原理をもっている。すなわち、三つの有機的体系をもっている。これは、機械的体系、道徳的体系、商業的体系である。これらを、動物の筋肉系統、神経系統、血液循環系統に比較することは不適切ではない。……機械的体系は、つねに道徳的組織（権威）にしたがうべきであり、その両者すなわち機械的体系と道徳的組織とは商業的効率（成功）に協力すべきである」(p. 55)。

本書はこうしたプランにもとづいているけれども、たちいってみると、その構成はたびたびゆがめられている。たとえば第1巻第1章「製造業の一般的原理」の後半部は、リフトなどの新発明についやされていたり、なによりも全巻を通じて、ユーアの出版目的である工場法をめぐる議論が登場する。ユーア自身も本書の「内容（叙述）と配列の双方における欠点に気づいていないわけではない」(p. xi)と弁明している。しかし、かかる欠点を数えあげ批判することにとどまってはならないであろう。なによりも、ユーア自身が産業革命のただ中であって、新しい時代の生産技術と労働の特徴をどう感知し、定式化したか、これこそが問題の焦点である。

ところで、本書の題名“The Philosophy of Manufactures”は邦訳名として『工場の哲学』が定着化している。しかし、これには問題があるようにおもわれる。なぜならば、本書の文中に“the philosophy of manufactures”という用語が多数みられるからである。たとえばつぎのようである。

「美術、詩、絵画、音楽の原理は、その個々の名作で一番よく研究できる

ように、製造業の原理（科学）は、その最も高貴な創作物を綿工場において研究することができる」（p. 2）、「製造業の原理は、動力の節約によく示されている」（p. 27）、（この他 p. 1, 34, 37）。

ここに使用されている “the philosophy of manufactures” は、内容からいっても、⁴⁾語義からいっても「製造業の原理」であって、本書の題名もこれをうけてつけられているのである。おもうに、『工場の哲学』という題名が定着したのは、マルクスがユーアを評して、「工場哲学者ユーア」（Der Fabrikphilosoph Ure）⁵⁾としたことにもよるようみえる。

マルクスは、1845年ブリュッセル滞在中にユーア『製造業の原理』（フランス語版、⁶⁾1836年）を読み、抜粋ノート（ノート B-30）をつくった。すでに1845年3月に F. リスト『経済学の国民的体系』への評註にユーアを引用している⁷⁾。マルクスによるユーアの著作利用は、それより後はフランス語版の抜粋ノートにもとづくものになって、1847年には『哲学の貧困』にこれを使っている。そして、1857～1858年『経済学批判要綱』において一箇所を抜粋している。しかしなんといっても、マルクスがユーアを本格的に検討したのは1861～1863年『経済学批判』（以下、『1861～1863年草稿』とよぶ）であって、その検討内容は、これから明らかにするところである。そしてこれにもとづいて『資本論』に使用されているのである。本稿では、さきに紹介したユーア原著のうち、第1巻第3章、第2巻をのぞいた部分を順次検討し、あわせて各部分に対する同時代人の批判、マルクス・エンゲルスによる評価をみていくことにしよう。

注

- 1) F. Engels, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, Marx-Engels Werke Bd. 2. S. 391, 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第2巻, 402ページ。以下, MEW. Bd. 2. S. 391, 402ページというように略記する。
- 2) W. V. Farrar, *op. cit.*, pp. 316-317.
- 3) W. V. Farrar, *op. cit.*, p. 315.
- 4) *The Oxford English Dictionary* の各項を参照。
- 5) MEW. Bd. 23. S. 317, 393ページ。

- 6) *Philosophie des manufactures ou économie industrielle de la fabrication du coton, de la laine, du lin et de la soie, avec la description des diverses machines employées, dans les ateliers anglais*, par Andrew Ure, D. M. ... Traduit sous les yeux de l'auteur, et augmenté d'un chapitre inédit sur l'industrie contonnière française, etc. Paris. L. Mathias (Augustin) Librairie, a Bruxelles, chez Périchon, Libraire. 1836. [製造業の原理, または綿・毛・亜麻・絹の製造の産業経済, 付, イギリスの作業場で使用されている各種の機械の説明。著者校閲の翻訳。フランス綿工業に関する未発表の一章を増補。パリ, マチュアス (オーギュスタン) 出版。ブリュッセルでは, ペリション販売, 1836年]
- 7) K. Marx, Über Friedrich Lists Buch "Das nationale System der politischen Ökonomie", *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, 1972. S. 440. 村田陽一訳「フリードリヒ・リストの著書『政治経済学の国民的体系』について」『経済』1972年9月号, 226ページ。

II. 第1巻第1章「製造工業の概観」の分析

(1) 「製造業」の意味

ユーアは、まず^{マニファクチュア}「製造業」という言語の変遷をたどり、「製造業の原理」とは何かを明らかにしている。

^{マニファクチュア}「製造業」は、言語の移り変りのなかで、その固有の意味の反対を示すようになったことばである。なぜなら、それは今では人間の手の助けをほとんどまたは少しもなしで機械によって作られる（工場の——フランス語版のみ）技術の全ての広い範囲の産物を意味しているからであって、最も完全な製造業は人間の労働はまったくいないほどである。したがって、製造業の原理(科学)は、それによって生産的工業が自動機械によって行なわれるべき一般原理の説明である」(p. 1, 傍点は原著者、以下同様)。

ここに示されているように、^{マニファクチュア}製造業とは、人間の手を使うことから、それを不要とする自動機械による生産を意味するところとなった。したがって「製造業の原理」とは、自動機械による生産の、したがって、マルクスのいう「大工業」の一般原理の解説となるのである。

(2) 製造業の区分

この自動技術を、ユーアは物の外的変形か内的組成変化かを基準に、機械的技術と化学的技術とに区分する。

「……商業一般に役立つ自動技術は、それが支配をうける物の外的な形を変えるか、内的組成を変えるかに応じて、機械的技術か化学的技術かに区別することができる」(p. 1)。

(3) 化学製造業の特質

機械的製造業に対する化学的製造業の特質はつぎの点にある。

「化学的製造業は、二つ以上の物質のあいだの微妙な親和力の働きに依存しており、やや不安定な環境のもとで、加熱と混合を受けなければならず、したがってそれに応じた手の操作が必ず残る」(p. 2)。

化学的製造業の分野では、自動原理は、純粋化学の硫酸製造業と、混合化学の五色更紗捺染とにみられる。「しかし、自動工業の完成がみられるのは綿工場である」(p. 2)。

(4) 綿工業と「製造業の原理」

「美術、詩、絵画、音楽の原理は、その個々の名作で一番良く研究できるように、製造業の原理(科学)は、その最も高貴な創作物を綿工場において研究することができる」(p. 3)。

ユースはこの立場から、本書でとりあげる5種類の工場(第2巻第2~6章)はイギリスでは蒸気または水力で動かされ、多くの児童、青年を雇い、1833年8月29日、議会を通過した工場法の規制下にあるとして(p. 3)、『製造業の原理』の考察対象が社会・法律的にも有意義であることを示している。これに対して、J. R. マカロックは『エディンバラ・レビュー』の匿名書評¹⁾において、製鉄所、染料場、醸造場などを排除しているにもかかわらず、『製造業の原理』という題名をつけるのは不当であるという批判を行なっている。ユースは、『英国綿工業論』序文でこれに反批判²⁾を加え、「工場」という用語は、1833年の工場法にもとづいていることを重ねて強調している。

注

- 1) *The Edinburgh Review, or Critical Journal*, Vol. LXI. 1835. p. 454. なお M. Berg, *The Machinery question and the making of political economy. 1815-1848* (Cambridge U. P. 1980) p. 199 参照。

- 2) A. Ure, *The Cotton Manufacture of Great Britain*, Vol. I. Introduction. 1836. p. x.

(5) イギリスにおける製造業人口

ユースはひきつづいてイギリスにおける人口統計を分析して、「農業の少くとも二倍の個人の勤労者が技術、製造業、商業に従事している」(p. 5) と結論している。

(6) 工場に対する誤解

このように重要な製造業であるにもかかわらず、「工場に関する最近の議論において、わが指導的な立法家や経済学者の示す大きな無知ほど注目に値すべき事態はない」(p. 6) という。この無知をなくすことが本書の目的の一つとして強調されている。

(7) 物理—機械科学への非難

この無知の例としてユースはつぎのようにのべている。

「物理—機械科学が社会に与えた恩恵とそれが人類の運命を改善するために今なお用意している手段は、ほとんど注目されなかった。しかし他方、富んだ資本家（の野望に力を貸し——フランス語版のみ）に、貧者をいためつける手段として役立っていると非難され、職工から労働強化を無理強いしたと非難されている」(p. 7)。

この部分の記述は、マルクス『1861～1863年草稿』ノート XX-1263 において、「科学は資本に召し抱えられて労働を資本に隷属させる、とここで率直に白状するその同じユースは〔別の箇所では〕[こういうのである]」(K. Маркс и Ф. Энгельс, Сочинения, том 47. Экономическая рукопись 1861-1863 годов, Издательство политической литературы, Москва, 1973, стр. 556. 中峯照悦・伊藤龍太郎訳『1861～1863年草稿抄』大月書店, 1980年, 267ページ。以下, стр. 556, 267ページというように略記する)として引用されている。さらに、『資本論』では、第1巻第13章第5節「労働者と機械との闘争」でつぎのようにあつかわれている。

「……ユーアの著書が刊行されたのは一八三五年、すなわち工場制度の発展がまだ比較的低い時のことだったにもかかわらず、その著書が今でも工場精神の古典的な表現であるのは、ただたんにそのあからさまな無恥のせいだけではなく、彼が資本の頭の無思想な (gedankenlos) 矛盾をさらけ出しているその素朴さのせいでもある。たとえば、彼は資本が自分の雇い入れた科学の助けによって、『つねに労働の反逆的な手に服従を強要する』(p. 368) という『説』を展開したあとで、『それ』(機械—物理科学)『は金持ちの資本家の専制を助けて貧しい階級の抑圧手段に力を貸しているといっている或る方面から非難されていること』(p. 7) を憤慨している」(MEW. Bd. 23. S. 460, 571 ページ)。

このように『資本論』では、ユーア『製造業の原理』における他の部分の記述との矛盾について、「資本の頭の無思想な矛盾」を示す「素朴さ」のあらわれとみている。もっとも、『資本論』では、ユーアの引用が順序を逆にされている。

(8) 工場労働と手織工との比較

ユーアは、つづいて工場労働と手織工とを比較した議論についてこうのべている。

「たとえば、つぎのようにいわれてきた。今では、蒸気機関は力織機を（非常に速く——フランス語版のみ）動かして、その付きそっている織工を、同じ速いペースにかりたてる。しかし、（自宅で働く）手織工は、この休まない力（自動的原動機の連続的作動）に従属していないので、その都合のいいように（自由に）杼を投げ、ペダルを動かすことができる。しかしながら二つの場合にはつぎのような違いがある。……一方、工場でない（簡単な機械の）織工の場合、全てを筋肉を動かして行うので、労働はめんどりで、結果として、別々には少量であるが、いっしょになると多くの短い休みがある。したがって、比較的低い賃銀であり、一方貧しい食事と小屋の湿気によって健康を害する。マンチェスターのカーバット博士はつぎのようにのべている。『数晩前の（最近の）ロバート・ピール卿の、手織工は、大部分、小農夫であるという主張は、これはほど大きな誤りはない。彼らは、最もひどい様式で、町の地下室や屋根裏部屋で、最も低い収入で一六〜一八時間働いて生活している、というよりもやっと命を保っている』(pp. 7-8)。

このように、ユーアは手織工の労働様式と対比しての工場労働の優越性を強調している。マルクス『1861〜1863 年草稿』ノート XX-1246 は、この部分の前段を「労働用具を使用する手工業者と、労働者を使用する機械との相違」

(стр. 519, 216 ページ) の例として引用し、さらに後段部分について引用して、「だが、機械の競争のほかのなにが、彼らを地下室や屋根裏部屋に投げこみ、彼らに一六時間から一八時間もの労働を宣告したというのか？」(стр. 520, 216 ページ) とのべている。つまり、工場労働と手織工の労働を平列して比較する議論を批判して、手織工の労働の劣悪さは、工場の機械にもとづく労働との競争によるというのである。さらに、ノート XX-1267 では、つぎのようにのべたあとで、前段と後段をともに引用している。

「工場労働者に対するユーアの慰めの根拠は、実際のところはつぎのことにある。……とりわけ、機械によって没落させられた部門とか、機械と現に競争しなければならない部門とか、機械によって駆逐された労働者が過剰に投げこまれる部門といった諸部門の労働者のほうが直接機械制作業場に雇われている労働者よりもっとみじめだ、ということなのである。そしてこのことは、[ユーアによれば、工場] 制度は労働者階級に有利である、ということを証明するはずなのである」(стр. 526-563, 276-277 ページ)。

ユーアの指摘したこれらの事実と、マルクスのそれへの批判的引用は、『資本論』では、第1巻第13章第8節「大工業によるマニュファクチュア、手工業、家内労働の変革」において、いっそう詳細に展開されるようになる。

(9) 工場への非難の源泉（とくに始紡工）について

ユーアは、さらに「製造業における科学的改善の不変の目的と効果は博愛的である」(p. 8) として、自動化が遅れている、羊毛織物業の始紡工を例にとって、つぎのようにのべている。

「しかし、始紡工がアルコール中毒気味であり、激情的であるならば、工場主の情深い取り締りに反して、始紡工は、若い糸繫工に対して恐ろしい専制をふるう力をもつ。この種の職工は、工場の同居人ではあるが、正確に言えば、工場労働者（製造業者）ではなく、動力（自動機構）からは独立している。そしてこれが綿工場や他の工場に対して容赦なく投げつけられる悪評の主な源泉である。しかし、工場には、そんな気まぐれ（濫用）と残酷さは存在しないのである……」(pp. 8-9)。

ユーアは、自動化が遅れている始紡過程が、手の気まぐれをのこし、工場に対する非難の源泉となっているとし、科学にもとづく自動化がそれをなくすことができると強調する。これに対して、二年後に C. ウィングは『工場制度

¹⁾の害悪』において、始紡工の賃銀が、糸繫工の働きに依存しているので糸繫工を酷使することがおきるから、この制度そのものを変えなければならないと批判している。マルクスは『1861～1863 年草稿』ノート XX-1247 と 1263 でこの部分をつぎのように引用している。

「これらの労働者は、一部は、すでに言及した手伝い（ユアがここで語っているのは、彼らにかんしてである）であり、一部は、下士官（監督）、一部は〔作業場〕つきの技師と機械工である」(crp. 520, 217 ページ)。「本来の機械労働者のこうした手伝いは、〔工場〕制度の必然的な産物ではないかのようにである」(crp. 557, 267-268 ページ)。

ユアは始紡工と糸繫工のことをさしているが、マルクスはこれを手伝いや監督、技師、機械工などとしてうけとっている。

注

- 1) C. Wing, *Evils of the Factory System* (London, Saunders and Otley, 1837) p. Ivi.

(10) 生産に利用されない自動機械の歴史

ユアは、自動機構に関連して、それまでの自動機械の歴史をふりかえり、「ボーカンソーのあひる」などの自動機構を多数紹介している (pp. 9-11)。しかしこれらの「自動（装置）の発明は、機械科学の働き（傑作）としては立派ではあるけれども、社会の物質的必要物の供給には何も寄与しない」(p. 11) という。これに対して、生産のための自動機構は「衣類の原料に向けられている」(p. 11)。

(11) 機械的発明と製造業との区別

この綿製造業についてつぎのようにいう。

「イギリスよりも先に、工場制度（自動体系）を確立することにフランスが失敗したことは、大変注目すべき事実である。フランスが長い間、まさに名高かった機械的発明は、それ自身では、製造業を成功裏に築くために十分でないということがはっきりとした」(p. 12)。

つまり、機械的発明と製造業とを明確に区別している。そして、ユアは

さきのフランスのボーカンソー (Jacques Vaucanson, 1709-1782) が、絹工業と綿工業の種々の発明も行なっていた点に注意を向ける(p. 31)。

(12) 工場制度について

ユーアはさらにすすんで工場とは何かについて、つぎのように展開する。

「テクノロジーにおいて工場(制度、自動工場)という用語は、成人労働者と若年労働者の多くの等級の結合された作業(協業)を示しており、この労働者は、勤勉な熟練をもって、連続的に一つの中心動力によって動かされる生産機械の一つの体系につきそっている。この定義は、綿工場、亜麻工場、絹工場、羊毛工場、ある種の機械(製作)工場のような組織(工場)をふくんでいる。しかし、機構が連続した体系を形成せず、また一つの主動力に依存していない組織(工場)は排除している」(㉔)。

「後者については、製鉄所、染料場、石鹼製造場、真ちゅう鋳造場などにその例がある。実際、ある人々は、工場という表現の下に、一つの共通の技術目的に向かって協業する多くの人々が働いている全ての広い建物をふくめている。したがって、醸造所、蒸留所も、大工、旋盤工、樽師の仕事場と同じように、工場制度に分類されるであろう」(㉕)。「しかし、私は最も厳密な意味において、この工場という表現は、巨大な自動装置(automaton)の考えをふくんでいると考えている。この自動装置は、多くの機械的器官と知的器官からなっており、一つの共通の対象の生産のために、絶えまなく協調して働いており、それらの全てが一つの自己制御的な動力に従属している」(㉖)(p. 13)。「もし、技術的事業の遂行のために人間を体系的な秩序に配置することが工場を構成するとみとめられるならば、この用語は、土木技術と軍事技術の全分野をふくむであろう。この適用範囲はとうてい承認しがたい」(㉗)(p. 14)。

さきにみたように、ユーアの工場規定は、1833年の工場法の規制対象となるものに対応しているとともに、「自動機械による生産」を中心にすえている。この点がマルクスにより注目されることとなり、1857～1858年の『経済学批判要綱』(*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, S. 582, 642 ページ)で、㉔と㉗部分が抜粋されている。さらに、『1861～1863年草稿』ノートXX-1247においては、「典型的な工場すなわち機械制作業場の本質はどこにあるのか？」(срр. 520, 217 ページ)と問いかけたあとで、同じ部分を引用し、つぎのように評註している。

「機械制作業場の主要な特徴がここにある。[それは] 巨大な自動装置、すなわち自分で運動する一つの中心的動力から駆動力を受け取る相互に関連した生産的諸機構の体系である。この機械の体系がその自動的原動機といっしょに機械制作業場の身体

を、手足のある肉体を形づくり、いろいろな部類の労働者——彼らの主要な区別は、成年と未成年の区別、年齢と性の相違にある——の協業を組織しているのである。これらの労働者自身は、機械のたんに知能をもった器官としてあらわれるにすぎない（機械が彼らの器官としてあらわれるのではない）のであって、彼らは、死んだ器官とは意識のある点で異なっているが、死んだ器官と『協調して』、死んだ機械と同様に、死んだ器官の動力に従属して、規則正しく『休みなく』働くのである〔crp. 520-521, 217-218 ページ〕。

ここでは、労働者自身は機械のたんに「知能をもった器官」としてあらわれる点がとくに注目されている。さらに『資本論』では、第1巻第13章第4節「工場」において、ユアを自動式工場のビンダロスと評して、㊤部分と㊤部分を対比している。㊤の表現では、労働者が主体であり、自動装置が客体である。㊤の表現では、自動装置が主体であり、労働者は中心的動力に従属している。㊤の表現は大規模の機械の充用が可能なかぎり、そのどれにでもあてはまるものであり、㊤の表現は機械の資本主義的充用を、したがってまた現代の工場制度を特徴づけているとしている。このように、マルクスは、ユアが機械とその資本主義的充用とを区別していない点を批判している。

(13) アークライトの業績、工場法典

ユアは、工場制度の歴史をたどり、イギリスで工場制度の基礎をつくった、R. アークライト (Richard Arkwright, 1732-1792) の業績として、工場法典を案出し、実施したことにあると、こうのべている。

「おもな困難は、私の意見では、木綿を連続的な糸に引き伸ばし、よりをかけるための適当な自動装置の発明よりも、装置のちがった部分を、一つの協力体に分配することであった。すなわち、各組織を、その適度な精巧さと速度にあわせて動かすこと、とくに人々を訓練して、労働をするさいの気まぐれな習慣を捨てさせ、彼らを複雑な（大きな）自動装置の不変の規則性に一致させること（必要な規律）であった。工場の勤勉の必要性（自動体系の要求と速度）に適合するような工場規律のうまい法典を案出し、実施することは、非常に困難な事業だった。そして、これこそはアークライトの貴重な業績なのだ。この体系がまったく完全に組織され、その労働が極限にまで（およそ可能なかぎり）緩和されている今日でさえ、思春期を過ぎた労働者を、田舎出身であろうと、手工業出身であろうと、有用な工場の働き手にかえることは、ほとんど不可能であることがわかる。労働者の無関心と反抗的習慣を克服するために、し

ばらくの間努力した後、労働者は、自ら雇用を断念するか、不注意という理由で監督にやめさせられる」(pp. 15-16)。

自動工場での困難は、自動装置の規則性に一致させることであり、そのために工場法典が必要であった。それを実施したのがアークライトであったというのである。さて、マルクスは、はやくも1847年の『哲学の貧困』第2章第2節「分業と機械」において、この部分を注目、引用して、つぎのようにのべている。

「労働者は機械の応用をば、ブルードン氏がそう名づけるような、一種の復権、一種の復興とはまったく考えなかったので、一八世紀にはかなりの長いあいだ、彼らは自動機械の発生しつつある絶対的支配に対して抵抗したのであった」(MEW. Bd. 4. S. 155, 160 ページ)。

さらに『1861～1863年草稿』ノート XX-1247 では、同じ部分を引用してこう評註している。

「ユー・アはここで、[工場の仕事には]、たとえ徒弟奉公などがいらなくても、『規律』に従い、『大きな自動装置の一定した規則性』に終日従ってゆけるようになるためには、ひとは、工場主フーリエが名づけたこの緩和された徒刑場のなかで、若いときから働く必要がある、ということをしづしづ認めているのである。この自動装置(アウトマート)が、ここでは専制君主(アウトクラート)なのだ」(crp. 521, 218 ページ)。

そして『資本論』にいたると、まず第1巻第13章第4節「工場」で「兵營的規律」を例証するものとしてほとんど全部を引用している(MEW. Bd. 23. S. 447, 554 ページ)。そのさいに、注189で、ユー・アのアークライト賛歌を皮肉をこめて批判して「一八世紀の全ての大発明家のうちで、彼(アークライト)は、たしかに他人の発明の最大の盗人で最も卑劣な男であった」とのべている。また『資本論』の引用では、「その労働が極限にまで緩和されている」今日の工場という部分はぬけているけれども、同じ部分で「労働の緩和でさえも責め苦の手段になる」(MEW. Bd. 23. S. 446, 552 ページ)としている。つまり機械労働は筋肉の負担をへらす、その緩和された労働、たとえば見張りさえも、長時間行いすぎると有害で、「責め苦の手段」になるとしている。「労働の緩和」を根拠にして工場制度を美化したユー・アを念頭においての批判である。

(14) J. ワイアットの失敗とアークライトの業績

ひきつづいて工場制度の歴史をたどり、「手を使わない紡績機」をつくった J. ワイアット (John Wyatt, 1700-1766) とアークライトとを対比してこうのべている。

「ワイアットは温和で、消極的な人物で、新しい製造業の事業の困難に対処していく力はなかった。勤勉さが不規則に激発する（気まぐれに仕事を行う）ことになっている労働者のがんこな性質をしたがわせ、偏見、激情、ねたみにもかかわらず、複雑な複雑な作業（複雑で多様な機械の運行）をおしすすめることは、実際、ナポレオンのような神経（気力）と野心とをもった人間を要求した。そして、これがアークライトであった」(p. 16)。

この部分は、アークライト賛歌となっているけれども、工場制度と発明との区別、工場主と発明家との相違を明らかにしており、注目に値する。

(15) 蒸気機関と専制君主

ユアは、工場制度における蒸気機関の意義をこう語っている。

「数ヶ月間の私の最近の旅のなかで、製造業地域を通った。そこで、多くの男女の老若・中年の人々をみた。それらの多くは、あまりに弱くて、以前の産業様式のどれによっても日々のパンを手に入れるということはなかったのである。しかし、今では一滴の汗もかくことなく、十分な食料、衣類、住宅をもち、部屋は夏の太陽光と冬の霜からしきられている。わが立法家やりっぱな貴族が集まる首都の家よりも通気がよく、健康である。これらの大きな広間（作業場）では、仁慈な蒸気の力が無数の進んで働く家来を自分のまわりに集めている。そして、各々に決められた仕事を指示し、労働者の側での苦しい筋肉の骨折りにかかわって、それ自身大きな腕をもったエネルギーがあらわれ、時々、その労働者におこる小さな異常をなおすために、たんなる注意と機敏さとを要求している」(pp. 17-18)。

ここでユアは、蒸気機関の力によって、工場主の意図がつかぬける点を強調している。マルクスは『1861～1863 年草稿』ノート XX-1248 で、「ユアはまた彼の専制君主すなわち自動装置の『臣下』についてものべている」(стр. 522, 219 ページ) として、傍点部を引用している。『資本論』においても、同じ部分を引用し、機械の資本主義的充用、現代の工場制度を特徴づけるものとして、「それだからこそ、ユアはまた運動の出発点となる中心機械を、た

んにアウトマート（自動装置）として示すだけではなく、アウトクラート（専制君主）として示すことを好むのである」（MEW. Bd. 23. S. 442, 548 ページ）とのべている。

注

- 1) この部分の記述について、ユーアは E. Baines, *History of the Cotton Manufacture* (London, H. Fisher, R. Fisher, P. Jackson, 1835) から示唆をえていという P. Gaskell, *Artisans and Machinery* (London, John. W. Parker, 1836) p. 319 の指摘がある。

(16) スミス時代の分業と自動工場での分業

ユーアは、さらにスミスの時代の分業（労働の分割）と、自動工場での分業の相違についてくわしく考察している。

「アダム・スミスがその経済学的不朽の原理を書いた時、自動機械（工業の自動体系）はほとんど知られておらず、彼は正当にも労働の分割を製造業の改善の基本原則としていた」(A)。「彼は、ピンの製作で、各々の手職人が、ただ一つの点だけを行うことによって熟練すれば（完全になれば）、より速いより安い労働者になることを示した」(B)。「その原理にもとづくと、製造業の各分野では、ある種の作業、たとえば針金を同じ長さに切断するといった作業はやりやすくなり、そのかわり、ほかの作業、さきの頭を細工したり、それをとりつけるというような作業はより困難であるということを経験は知った」。「そこでこのことからこれらの作業のそれぞれに、適当な価値と費用の（自分の熟練に相応した賃銀をとる）労働者を無理なく適合させることができるという結論を彼はくだした。この充当 (appropriation) ということこそ労働の分割（配分）の本質なのである」(C)。「そして、これが社会のはじめ以来、常に行なわれてきた。力強い手と熟達した目をもった農夫は、あぜをつくるためにいつも、高い賃銀でやとわれてきた。一連の馬牛をひくため少年農夫が低い賃銀でやとわれてきた」。「しかし、スミス博士の時代には有用な例として役だちえたことも、今日では、公衆をして製造工業の正しい（実際の）原理にかんしてまちがった見解をいだかせるということにしか適さないであろう」(D)。「事実、さまざまの個人的能力の人間にもろもろの仕事の分割（配分）するということ、というよりも、むしろ、もろもろの仕事に適応させるということは工場雇用（自動工場の作業計画）のなかでは、ほとんど考えられていない」(E)。「反対に、ある過程が特別の熟練や確実な手腕を必要とする場合には、つねに（非常に熟練してはいるが——フランス語版のみ）、いろいろな不規則なことを起こしがちな（ずるい——フランス語版なし）労働者の手からできるだけ早くこの作業を取り上げて、子供が見張っていてもよいようによく自動制御され

た（非常に規則正しく自動的に作動する）一つの特別の機構にそれをゆだねるようになる」(㉔) (p. 19)。

以上の部分の叙述は、『製造業の原理』最大の眼目であって、多くの論者がユアの功績としてみとめているところである。まず、マルクスは『哲学の貧困』において、「アダム・スミスの時代にあったような分業と、われわれが今日自動作業場でみるような分業とのあいだには、なんという相違があることだろう！」(MEW. Bd. 4. S. 155, 160 ページ) とのべたあとで、ほとんど全文を引用している。さらに『1861～1863 年草稿』では、まずノート V-175 で「スミスがマニファクチュアにおける分業を特別に重視していることは、彼の時代が近代的工場制度の生成しつつある時代であったことを示している」(Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA) II. 3. 1. Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863), Dietz Verlag, Berlin, 1976, S. 273, 邦訳『マルクス資本論草稿集』④ 大月書店, 1978 年, 482-484 ページ) として、㉔㉕㉖㉗部分を引用している。また、ノート XX-1248 では、ほとんど全文を引用して、「それでもまだユアは、彼らの労働能力を減価させその専門的技能を通用しなくする『特殊な機構』に対して、これらの労働者が感謝しないことを不思議に思っているのだ！」(crp. 522, 219 ページ) と評注している。

『資本論』は、第 12 章第 3 節「マニファクチュアの二つの基本形態」で、「後者（不熟練労働者）のためには修業費はまったく不要になり、前者（熟練労働者）のためには、機能の簡単化によって手工業の場合とくらべて修業費は減少する。どちらの場合にも労働力の価値は下がる」(MEW. Bd. 23. S. 371, 460 ページ。『資本論』でのユア引用は、「どの手工業者も、……一つの作業の常習によって自分を改良することを可能にされて……いっそう安い労働者になった」となっている) として、㉘部分が引用されている。これは、ユアがマニファクチュア的分業の資本主義的性格を理解していたことを示すものである。また、第 13 章第 5 節「労働者と機械との闘争」において、「労働手段が労働者を打ち殺す」例として、㉙部分を引用している。以上のように、ユアが行なった指摘、すなわち、自動工場における分業の特質として、機械の導入が「成人男子労働者の代わりに、婦人・児童労働を用いる」点と、「自動体系では、労働

者の才能はますます排除される」傾向をマルクスは重視しているのである。

(17) 手作業制度下の分業と自動機械制度下の分業、機械工業での等級制の解体傾向

ユーアはひきつづいて手作業制度下の分業と、自動機械制度下の分業を比較して、さらに機械工業での等級制の解体傾向を指摘している。

「だから、工場制度（自動体系）の原理は、手の熟練（手仕事）にかえて、機械科学（機械的技術）をもってし、また職人たちのあいだで、作業を分割したり（段階づけたり——フランス語版なし）することにかかわって、一つの過程をその基本的な諸構成部分に分割することである」(A)。「手作業計画（制度）によれば、多かれ少なかれ熟練した労働（手仕事）が、通常、生産（生産物）の最も経費のかかる要素であった。——細工は材料より優れている。ところが、自動計画（自動体系）では、熟練労働（職人の技能）はだんだん排除され、最終的に、機械のたんなる監視人たちによってとってかわられるであろう」(B)。「人間性の弱点があらわれて、労働者は熟練すればするほど、ますますわがままになって取り扱いにくくなり、当然機械的体系（の要素——フランス語版なし）にあわなくなり、その結果、彼の時々気まぐれによって、全体に重大な損害を与えることになる」(C)。「したがって、今日の製造業主の主眼は、科学と資本とを結合することによって、彼の労働者の労務を、彼ら労働者の用心深さと巧妙さ——これらの能力は、彼らをただ一つの過程（対象）にのみ集中させれば、若いうちにりっぱに完成される——との行使に化してしまうことなのである」(D)。「機械工学の初期、機械（製作）工場は、さまざまな度合いの労働の分割を示していた。やすりやきりや旋盤は、それぞれ、熟練の程度に応じて、固有の労働者をもってした」(E)。「しかし、仕上げ工、孔あけ工の器用な腕前は、今では、平削盤、キー溝切盤、ボール盤などにとってかわられている。そして、鉄や真ちゅうの旋盤工のそれは、自動送り付の旋盤にかわっている」(F)。「ベルパーとミルフォードの大木綿工場の機械部門を指導しているアンソニー・ストラット氏は、養成所の古いきまりきった仕事をまったくやめてしまったので、正規の年俸奉公によって、その熟練をならった労働者を通常雇わなくなるだろうというくらいである」(G)。(pp. 20-21)

以上の部分は、⑩までが『哲学の貧困』でひきつづき引用されている。『1861～1863年草稿』ノート V-190 においては、「機械製造そのものが、——したがって機械の存在が——分業の原理が完全に実施されている作業場にもとづいているからである。さらにすすんだ発展段階ではじめて機械製造その

ものが機械の基礎の上で——機械作業場によって——行なわれるのである」(MEGA, II. 3. 1. 3. 294, 515 ページ) とのべたあとで、㊤㊤ 部分を引用している。またノート XX-1248 では、この部分を全文引用し、パラグラフごとに評註をつけている。すなわち、㊤部分のあとで、「そして、技能者から単純な見張りにかわることに対して、労働者は感謝しなければならないというのだ！」(ср. 522, 220 ページ) としている。㊤部分のあとでは、「そこでは、彼自身が自動装置でなければならない」(ср. 522, 220 ページ) とのべている。㊤部分のあとでは、「ユーア氏はここで、自動体系も、分業と同様に、仕事をただ一つの対象に固定するというのを、——まだ未発達な人間をまったく若いうちからひき裂いて『自動装置の器官』にしなければならないということ告白しているのだ」(ср. 522, 220 ページ) と鋭い分析を加えている。㊤部分のあとでは、「たしかに、機械が台頭してまもなく徒弟奉公にかんする法律は廃止される運命にはあったけれども」(ср. 523, 221 ページ) という。

以上の作業を基礎として『資本論』でも多くの部分が使用されている。まず、㊤部分は第 13 章第 1 節「機械の発達」において、マニユファクチュアとの対比で機械による生産が考察されて、「この場合には、総過程が客観的に、それ自体として考察され、それを構成する諸段階に分解されるのであって、それぞれの部分過程を行なうことやいろいろな部分過程を結合することの問題は機械学や化学などの技術的应用によって解決されるのであるが」(MEW. Bd. 23. S. 401, 496 ページ) という部分で引用されている。㊤部分は、前項の㊤部分と同じ所に出てくる。ただし、『資本論』では、ユーアの引用が「自動体系では、労働者の才能はますます排除される」(MEW. Bd. 23. S. 456, 565 ページ) となっている。㊤部分は第 12 章第 5 節「マニユファクチュアの資本主義的性格」において、マニユファクチュアの限界をのべたところで、「手工業的熟練はマニユファクチュアでも、相変わらずその基礎であり、マニユファクチュアで機能する全体機構も労働者そのものから独立した客観的な骨組みはもっていないのだから、資本は絶えず労働者の不従順と戦っているのである。そこで、おなじみのユーアは、つぎのように叫ぶのである」(MEW. Bd. 23. S.

389, 482~483 ページ) として引用されている。㉔㉕㉖の部分、第 13 章第 4 節「工場」の「マニファクチュア的分業を特徴づけている特殊化された労働者の等級制にかわって、自動的な工場では、機械の助手たちがしなければならない労働の均等化、または水平化の傾向があらわれる」(MEW. Bd. 23. S. 442, 549 ページ) という部分で参照箇所として示されている。㉗部分からすると、「労働の均等化、水平化」とは、「熟練労働はだんだん排除される」傾向と結びついている。㉘部分は、㉕部分にひきつづいて、マニファクチュアから機械制への転化の必然性をのべたところで、「マニファクチュア的分業のこの産物はこんどは機械を生み出した」(MEW. Bd. 23. S. 390, 484 ページ) という部分で引用されている。ただし、ユーア原文の「熟練の程度に応じて」という部分に、『資本論』では、「等級制的に編成された」という表現が付加されている。

以上のように、ユーアがマニファクチュア的分業と自動工場分業とのちがいを正しくとらえていた点をマルクスは評価し、かつ前項でのべた点をユーアがはじめて問題提起した点をもとめている。後半部分では、機械工業での等級制の解体傾向の指摘があるのは興味深い。これは、等級制解体の傾向が、自動工場の典型である紡績工場でのみ起こっていたのではないとユーアが示したものとおもわれる。

(18) 労働の均等化傾向

ユーアは、ひきつづき自動工場における「労働の均等化傾向」についてのべている。

「マンチエスターの著名な機械製造業者は、私につぎのようにのべた。彼は、現在、蒸気機関をつくる考えはない。というのは、彼の現存の手段では、労働の分割の古い原理にたよる必要が出てくるだろうからである。そうすると、労働者のあいだに、ねたみとストライキ(暴動)が広がる。しかし、彼は、労働の平等化、すなわち自動計画(自動体系)にもとづく適合した配置が準備できれば、いつでもその分野を営むつもりであるという」(p. 21)。「等級制度(労働の等級)にしたがえば、一定の機械的な仕事(機械のように力業)をなしうる目と手が巧妙になるまでには、数年の年俸公をする必要がある。ところが、一つの過程をその構成諸要素に分解し(還元し)、

その全ての部分を自動機械に合体する（の作用にゆだねる）制度にしたがえば、普通の（注意力と——フランス語版なし）能力をもっている人を、短期間実習させた後、彼にこの同じ要素的諸部分をまかせることができるし、非常の場合には支配人の意志によってある機械から他の機械に移されることさえできるのである。このような交替は、労働を分割して、ある労働者にはピンの頭を作る仕事を割り当て他の労働者にはピンの先をとがらす仕事を割り当てるといふ——これは、最もたいくつで精神を疲弊させる画一性を一生ともなっている——古いやり方とは、明らかに矛盾している」（p. 22）。

この後半部は『哲学の貧困』にひきつづいて引用されている。『1861～1863年草稿』では、ノート IV-166、ノート XX-1248～1249、ノート XX-1264で、「自動体系にもとづく労働の均等化」として引用されている。『資本論』においては、この部分を参考としてマニュファクチュアの分業廃棄の技術的基礎を論じていると推定される。マルクスは、ユーアがこの技術的基礎・可能性をすぐさま現実としてえがいて、「古い分業体系」が「最もいやな形で再生産され確立される」点を無視していることを指摘して、「彼（ユーア）は、むしろ、なぜこの『古いやり方』が自動的な工場ではただ『必要な場合』にだけ放棄されるか、を問題にすべきだったであろう」（MEW. Bd. 23. S. 444, 550～551 ページ、注 182）といっている。

(19) 労務平等分配制度

「労働の均等化傾向」は「労務平等分配制度」の基礎である。

「どの職業においても、労働者の卓越さがたびたびその健康と安楽を犠牲にして、いかにあがなわれなければならないかをみるのは、実に残念なことである。たえ間のない技巧と勤勉を要求する一つの単調な作業に対して、労働者の手と目は常に緊張している。もし、その手と目が、ちょっとのあいだでも、仕事からはずれることがあれば、その仕事が時間賃銀から出来高賃銀かに応じて雇用者が作業者に大きな損失が起きる」（p. 22）。「しかし、自動機械（体系）の平等化の計画（原理）では、職工はその諸能力を快適な労務にだけ服する。彼は不安と疲労になやまず、彼の主人、または彼自身の利益をそこなうことなく、娯楽や黙想のための休み時間が多くみつけられる。彼の職務はよく調整された機構の働きを監視することなのであるから、彼はそれをわずかな時間で習得できる。そしてまた、彼が彼の勤務を一つの機械から他の機械に移す場合には、彼は、彼の労働と彼の仲間たちの労働の結果として生れる総体的結合を

熟慮することによって、彼の労務に変化をあたえ、彼の見方を拡大させる。だから、それにはそれなりの理由があって、道徳的作家から労働の分割のせいにされてきた、あの能力の拘束、あの思想の偏狭化、あの肉体の不如意などは、普通の場合、労務平等分配制度のもとでは起こりえないのである」(pp. 22-23)。「労働（産業）の後者の制度（労務平等分配制度——引用者）がひろがっているランカシャーの工場の機械工（職人）は、その勢力と知性においてロンドンの手工業職人にくらべいかにすぐれているであろう！ ロンドンの手工業職人は、かなりの程度、前者の制度（等級制——引用者）の奴隷である。一つの制度（労務平等分配制度——引用者）は、ほとんど全ての物理的機械的結合を熟知しているが、他の制度（等級制——引用者）は、その日々の仕事のピンの頭のこと（狭い範囲）以上はほとんど知らない」(p. 23)。

以上の部分のうちで、中間のパラグラフが『哲学の貧困』や『1861～1863年草稿』ノート XX-1249, 1263 で評註なしで引用されている。ユーアの指摘するように、手工業の等級制とちがって、機械制工業では、「全ての物理的機械的結合」を知るようになり、その点では進歩的性格をもっているのではあるけれども、ユーアはそれを根拠にして手工業にくらべての工場制度の優位を強調し、工場制度に固有の矛盾を無視し、弁護論になっている。

(20) 機械改善の目的と傾向

ユーアは、自動機械工場についての一連の叙述のまとめとして、「機械改善の目的と傾向」についてつぎのようにのべている。

「機械についての一切の改善の不変の目的とその傾向とは、実際のところ、全然人間の労働なしにすまずことか、さもなければ、婦人や幼少年者の勤労をもって成年工のそれにかえることにより、または、普通の労働者の労働をもって熟練職人のそれにかえることによって人間の労働の費用（価格）をきりさげることか、いずれかである」(p. 23) (㉔)。「水力より糸（連続的生産過程をもつ紡績工場）すなわち（イギリスの——フランス語版のみ）シュロッスル綿工場のほとんどの場合、紡績は一六歳かそれ以上の女性によって全て行なわれる。普通のミュール紡績機にかわって、自動ミュール紡績機にとりかえる効果は、成人男子の精紡工の大部分を排除し、若者と児童を保持することである。ストックポート州の近くの工場主は、議会委員会委員への証言として、この交替によって、各々約二五シリングの賃銀の四〇人ちかくの男子精紡工を不要にした結果、賃銀が週五〇ポンド節約されたという」(㉕)。「多年の経験をもつ職人のかわりに、いきいきとしたまなざしとしなやかな指先とをもつ児童だけを使用しようとするこの傾向は、熟練のさまざまな段階にしたがった労働の分割という学者ぶ

った独断が、ついにわれわれの見識ある製造業主たちによってくつがえされた（利用しつくされた）ことを証明するものである」（p. 23）（©）。

④と©は『哲学の貧困』で引用されている最後の部分である。『1861-1863年草稿』ではノート V-175 で©部分、ノート XX-1263 で④部分が評註なしで引用されている。ノート XX-1249 では全文引用されている。とくに©部分について「英語版では exploded [くつがえされた] となっている。フランス語への翻訳によって、みごとな二重の意味が出てきている」（crp. 523, 222 ページ）とのべている。これは、マルクスのユーア『製造業の原理』からの引用が、フランス語版にもとづいているものの、英語原本を参照していたことを示しているところである。マルクスはひきつづく評註でつぎのようにのべている。

「ユーアは、『傾向』と『不変の目的』を、つまり労働の排除、^{ファクトリー}『自動装置＝専制君主』への労働者の従属、成人男子〔の労働〕を女性や児童の労働に、また熟練労働者をありふれた労働者にかえることによる労働の価格の減少などを非常に正確に記述し、これらを自動作業場の本質としたあとで、彼は、このすばらしい制度の発展を労働者がストライキによって加速するといって労働者を非難するのだ！ この制度は、彼らにとって最良のものなのだから、その発展を『力づくで求め』なくてもほかに利口なやり方があるだろう！ とにかく、自動作業場では女性と児童が圧倒的な役割を果たしているということが、この作業場と、『年季のはいった職人』を必要とする労働の分割にもとづくマニファクチュアとの本質的な相違をいちばんよく証明している」（crp. 523-524, 222-223 ページ）。

この叙述に示されているように、マルクスは、ユーアが自動工場の本質、機械改善の「傾向」と「不変の目的」を正確にみていることを評価している。

『資本論』では第13章第5節「労働者と機械との闘争」において、④部分を引用して、「およそ、資本主義的生産様式は労働条件にも労働生産物にも労働者に対して独立化され疎外された姿を与えるのであるが、この姿は、こうして機械によって完全な対立に発展する」（MEW. Bd. 23. S. 455, 564 ページ）とのべている。ユーアが、機械の資本主義的充用を客観的には指摘している点を注目しての記述である。

ユーアは、工場における科学の結実について、学者の空論と対比してこうのべている。

「時代おくれの資料から、仮定の結論をひき出すか、あるいは実際にはほとんど起こりえない困難を魔法を使って呼び出す世を捨てた学者とくらべて、製造業者は技術の一般的理法をたぶんよりよく心得ており、またその技術を真理の原理へと分析するよりよい資格がある」(pp. 23-24)。「また大学で長く実を結ばずにいた多くの法則が、工場において物理学のなかで貴金な(金の)果実を結ぶのがみられるのである」(p. 24)。

ユーアはその事例として、熱、蒸気、温度に関係する工場における実際科学について紹介している。¹⁾最後のパラグラフは『1861~1863年草稿』ノートXX-1249で評註ぬきで引用されている。

注

- 1) M. Berg, *The Machinery question and the making of political economy, 1815-1848*, p. 198はこの部分におけるユーアの批判は、C. パベジなどをさしたものであるとしているけれども、その根拠はあまり明確ではないようである。

(22) 機械の分類

ユーアはすすんで、「製造工業(の原理——フランス語版のみ)を分析するにあたって、機械の一般的機能およびその改良の効果が十分に考察されなければならない」(p. 26)として、機械の分類をつぎのように行なっている。

「機械はつぎの三種である。1. 動力発生に関連した(使用する)機械。2. 動力伝導とその調整に関連した(使用する)機械。3. 種々の形態をなす物質を、商業の対象にかえるための動力利用に関連した(使用する)機械。I. 動力発生(にしたがう)機械は、重力、慣性、凝集力に対して(反——フランス語版なし)作用することによって活動する。蒸気機関は水蒸気の膨張力によって重いピストンを上下し、これによって重いビームと伝導装置を動かす。水車は、水の自然流動、すなわち高い水平面から低い水平面への水の落下によって蒸気機関と同じ作用をもたらす。(同じ原理で)風車は大気の流動によって回転する。採鉱における岩石の爆破(方法)は、弾力が凝集力にまさることを示すものである。II. 動力の伝導、調整の(に使用する)機械は、種々の歯車、はずみ車と、工場のバルブの調節器、軸、伝導装置からなっている。III. 種々の物質の形態の変化に動力を応用する機械は、一見してあまり種々雑多であるので、その系統的な配列(を導く試み)は不可能であるともおもわれる。次章で、その

関連と依存の概要を示したい」(p. 27)。

一見明らかなように、ユースによる機械の分類は、マルクスの「発達した機械」の三つの部分、原動機、伝導機構、道具機（作業機）という規定の原型をなしているようにみえる。ユースによる「機械の分類」は、先行する、C. バベジの「機械の分類」の延長線上にある。すなわち、バベジは『機械と製造業の経済論』において、機械を「動力の生産にたずさわるもの」と「動力の伝導と仕事の遂行とのためだけのもの」の二種に区分していた。ユースはバベジによる機械の二分類のうち、第二の機械をさらに二つに区分して、機械を三種に分類したのである。したがって、「機械の分類」の系譜としては、バベジ→ユース→マルクスということになるであろう。しかし、マルクスがユースの「機械の分類論」をノートした部分は、『1861～1863年草稿』その他の草稿類にみい出せない。

注

- 1) Charles Babbage, *On the Economy of Machinery and Manufacture* (London, Charles Knight, 1832) p. 15.

(23) 蒸気機関による動力の節約

ユースは、「製造業の原理は、動力の節約によく示されている」(p. 28) とのべ、馬の使用と対比して蒸気機関による動力の節約を分析している。

「馬はその全力をあげて活動しても、二四時間のうち八時間のみ仕事ができるのに対し、蒸気機関は休養を必要としない」(p. 28)。「……この一カ年の費用は一五六五ポンド、すなわち生きた馬の使用に必要な費用の五分之一に足らないのである」(p. 28)。「また、その主要費用、管理の点でも、動物の動力は蒸気動力よりもはるかに費用がかかる。四〇年前にボウルトン、ワットによって作られた多くの機関（機械）は、それ以来長く（たえず）運転されているが、ほとんど修理を必要としなかった」(pp. 28-29)。「蒸気機関は、製造業者の維持のみに止らず、その増大に対して手段を提供する。蒸気機関は燃料に対する大きな需要をつくり出す一方で、炭坑（たまり水）の排水、石炭の捲き上げに強力な武器をあたえ、多くの鉱夫、技師、造船業者、水夫に職をあたえ、運河、鉄道の開設（建設の必要）をよびおこした」(p. 29)。

ユースは、蒸気機関による動力の節約を、国民経済のなかに位置づけて、燃

料需要の拡大、他産業への影響、耕地の拡大、外国貿易にまでわたって考察している。マルクスの『1861～1863年草稿』ノート XX-1249, 1250 は、この部分を抜粋しているが、「馬はその全力をあげて活動しても、二四時間のうち八時間のみ仕事ができる」(p. 28) という部分に対して、「それで、子どもなら一二〔時間働ける〕?」(стр. 524, 223 ページ) と皮肉をこめて評註している。『資本論』における「馬の力」についての記述 (MEW. Bd. 23. S. 396, 491 ページ) はこれにもとづいている。

(24) 機械の改良方向

ユーアは、「機械の改良」をつぎの三点に整理している。

「(1) 機械は、これなくしてつくることのできない商品(生産物)の製造を可能にする。(2) 機械は、時間、労働(labour)、仕事(work)(生産物)の質は不変であるにもかかわらず、職工に従来よりもはるかに多くの仕事の量を可能にさせる。(3) 機械は熟練のいる労働を比較的未熟練な労働にとりかえる(機械は、ほとんど技能をもたない労働を高度の完成に達した労働におきかえる)」(p. 30)。

このうち、命題(2)は、使用価値と価値との混同がみられ、労働強度の問題を度外視しているので、『1861～1863年草稿』ノート XX-1250 では、こう評註している。

「この〔記述〕では、第一に、労働時間の絶対的延長が、第二に、労働の連続性に関連するかぎりでの労働の強度の増大が除外されている。ここでユーアが提出しているような命題は、われわれがほかのところで考慮にいられた労働の強度の増大〔の場合〕とは異なり生産物全体の量は増えてもその価値は一定でかわらない、というかぎりでは正常な命題として受け入れられるべきものである」(стр. 524～525, 223-224 ページ)。

この他、ノート XX-1264 でも、同様の叙述がみられる。

(25) イギリス製機械の優位性確保

ユーアは、諸外国の追い上げを強調して、ひきつづきイギリス製機械の優位性を確保する必要性をといっている。

(26) 工場建築学の成立

つづいてユアは工場における機械の配置について考察をすすめるにあたって、工場建築学について、その起源をたどり、マンチェスターの技術者フェアバーン (William Fairbairn, 1789-1874) とリリーの工場建設会社を紹介している。本書の巻頭にかかげられている絵は、フェアバーンによって建てられたオーレル (ストックポート) の大工場である(p. 33)。

(27) 工場の分解図

ユアは、工場の分解図をつぎの順序で示す予定であるとのべている。この予告は翌年出版された『英国綿工業論』で果たされることになる。

「①工場の二重の心臓、すなわち二つの蒸気機関。一方は最大出力、他方は最少出力である。軸の分岐を通じて完全に均一な力を確保する。そして、以前には一般的であったデリケートな機械の仕事に有害な動脈の動揺を防ぐ。②機関の動力を、垂直・水平の直角方向へ伝える、傘歯車は、速度の調整もする。③いくつかの滑車つきの水平・垂直軸。④回転する軸と滑車から力を伝えるベルトの配分。⑤各階の種々の生産機関の位置。準備機、シュロックスル (連続) 紡績機、ミュール紡績機、力織機、糊付機、整経機など」(p. 34)。

ユアは、このうちすでに説明した①をのぞいて、順次説明を加えている。

(28) 伝導機構について

ユアは伝導機構の改良について、そこに「製造業の原理」がみられるとし、より軽い耐用度のある伝導機構が、より大きな力を増大した速度で、摩擦を少なくして伝えているとのべている (pp. 34-37)。マルクスは『1861-1863年草稿』ノート XX-1250 で、この部分に対して、「伝導機構における節約」と評註している。

(29) 自動機械による機械製造の重要性

ユアはつづいて、自動機械による機械製造の重要性についてくわしく展開している。

「イギリスの資本家は、その技師によって強く支援されている」(A) (p. 37)。「現

在、ほとんどあらゆる工具は、程度の差はあってもみな自動的で、〈労働者の——フランス語版のみ〉手で行うよりははるかに安く精密にその仕事をできる。……」(p.37) (㉓)。「多数の類似した部品が、紡績装置の一部となっていると(紡績機械が多くの類似した部品を必要とするとき)、平削盤やキー溝切盤などの自動工具によって、これらの部品は、その形、大きさを完全に一様化され、そして全体の構造(機構の全体)のなかで、そのうちのあるものはすぐに他のものにかわり、適合できるようになるのである」(p. 37) (㉔)。「……マンチエスターとリーズ地方における機械関係の人材と活動の集中は、いいあらわすことができないほどである」(p. 38) (㉕)。「紡績と織布を行う一大綿紡織工場がランカシャーに設立された驚くべき速度は、上は巨大な蒸気機関、水車、鉄けた、継手から、シュロックスル(連続)紡績機、織機の最も小さな部品に至るまでのあらゆる種類の型の大きな貯蔵量によって可能となったのである」(p. 39) (㉖)。「自動工具の使用から生じた仕事の容易さは、工場の機械の精密さを改善し、機械の製作を速めただけでなく、驚くべき度合でその価格を低下させ、その運動性を増大させた」(㉗) (p. 40)。

以上の叙述は、機械製造業の重要性と、それが自動機械によって製作されることによる機械の精密さの増大、機械製作の速度増大、機械の低廉化を強調している。マルクスは、『1861～1863年草稿』ノート XX-1250 で、㉔部分を抜粋・引用している。㉔部分は互換性部品の先駆的形態として注目される¹⁾。マルクスは、「作業機における節約」としてこれを整理している。㉕部分は、同じノート XVIII-1151 (MEW. Bd. 26. III. S. 435, [『剰余価値学説史』第 III 巻] 573-574 ページ) で、「蓄積にとって生産手段の現存量と生産の現存規模とがどんなに重要であるかについて」として引用している。㉖部分は、同じくノート XX-1250 で抜粋され、『資本論』第 3 巻第 5 章「不変資本充用上の節約」で、「機械製造一般の改良による機械類の低廉化、したがって、不変資本の固定部分の価値は、大規模な作業の発達につれて絶えず増大するとはいえ、けっしてそれと同じ程度には増大しないということ。注 12, 工場建設の進歩についてのユーアの所説を見よ」(MEW. Bd. 25. S. 91, 102 ページ)、ならびに「新たな機械の最初の製造費とその再生産費との大きな相違、これについてはユーアとバベジを検討しなければならない」(MEW. Bd. 25. S. 114, 132 ページ)として参照部分になっている。㉗部分は、ノート XVIII-1152 (MEW. Bd. 26. III. S. 435, [『剰余価値学説史』第 III 巻] 574 ページ)で、つぎのようにのべ

たあとで引用されている。

「発展が進むにつれて、機械は、あるいはその出力に比べて相対的に、あるいは絶対的に、低廉になっている。しかし、同時にそれには一つの工場における機械の大量集積が結びついていて、そのために、たとえ機械の個々の構成部分の価値は減少しても、機械の価値は、充用される生きている労働に比して相対的に増大するのである」。

このように、㊸㊹部分は、マルクスにとっては資本蓄積論、「資本の有機的構成の高度化」の問題、さらに「不変資本充用上の節約」の問題の素材を提供するものとなっているのである。

注

- 1) A. E. Musson and E. Robinson, *Science and Technology in the Industrial Revolution*, pp. 478-479 参照。

(30) 労働組合と自動機械の発明

ユーフは、糊付機について、「賃銀が高いため、つねに組合とストライキ(暴動)によって攪乱されるので、ついに自動機械」(p. 40)が発明されたという。

「このことは、ストライキにかんして、科学が資本の要求に応じ(資本を助けて)、労働者がつくった不法な組合(陰謀)をいかにうちまかしうるかを、労働者に知らせ警告した(実例である——フランス語版のみ)」(pp. 40-41)。「労働者の組合は、彼ら自身の秩序の利益に対する謀叛であり、また常にその組合組織の自滅におわる——これは、その団結がより強圧的でよく組織されればされるほど、いっそう早くそういう結果になる——ということは製造工業の分析から出てくる最も重要な真理の一つである」(p. 41)。「もしなんな組合がなければ、雇用(人員)の変化、手労働のかわりに自動機械(労働)を採用(代替)することが、職工に対し急に損害となることはほとんどまれであるとおもわれる」(p. 41)。

ユーフは自動機械の発明について、その契機としてストライキをあげている。そして組合を非難しているけれども、一方で組合がストライキによって自動機械の採用をはやめたとし、他方で組合がなければ自動機械の採用はもつとはやまり、労働者に有益となったという矛盾した論理を展開している。くわしくは、第3巻で検討されるところである。

(31) 工場主と生産の知識

ユーアは、工場主の生産に関する知識についてつぎのようにのべている。

「大ブリテンの工場所有者は知識があり、またその能力と富において世界中(国中)の土地貴族にくらべられるのは疑問がないけれども、工場所有者は、その成功の要因についての、秩序整然とした研究によって、その利益を極限にまで追求できる」(p. 42) (A)。「現在、工場所有者によって使われている多くの機械は、物理科学、機械科学の双方の最も優れた応用のたまものであり、十分に研究すれば、その事業の生産活動を商業の活動と同じようにはっきりと理解することができ、ずるい山師がときとして採用させようとする有害な発明から自らを守ることができる」(p. 42) (B)。「判断・知識・高潔さからして、工場主の健全な商業的観点をたすけ利潤の上がる仕事をすすめるのに適した多くの工場支配人がいるのはうたがいない」(p. 43) (C)。「こういう実際の人間がわが工場制度の魂をつくるのである」(p. 43) (D)。「この種の教育は、機械自体のなかにおいて最も容易に得ることができるとおもわれる。しかし、これは経験がすぐ証明するように誤りである」(p. 43) (E)。「一連の機械の動きについて説明できないマンチエスターの工場のいく人かの工場主にあった」(p. 43) (F)。

こうして、工場主の機械科学に対する相対的無知をみとめたユーアは、工場主に対してこれを独自に学習する必要をとき、そのための学習書を提供するという意図をもこめて本書を出版したのである。マルクスは『1861～1863年草稿』ノート XX-1250 で(A)(B)(D)(E)の部分引用抜粋している。またノート XXI-1318 (MEW. Bd. 26. I. S. 367, [『剰余価値学説史』第I巻] 498 ページ)で、「資本家は、ある機械を充用しても、その機械を理解する必要はない(ユーアを見よ)」とのべているのは、この部分をさしている。『資本論』においても、第1巻第13章第2節の注108で、「科学は資本家にとっておよそ『少しも』費用のかからないものであるが、このことは彼が科学を利用することを決して妨げないのである。……ユーア博士でさえも、自分の愛する機械利用主たちの機械学に対するひどい無知を嘆いた」(MEW. Bd. 23. S. 408, 505 ページ)とのべている。また、第3巻第23章「利子と企業者利得」において、(D)部分をさして、「産業資本家ではなくて産業管理者こそ『われわれの産業制度の魂』であるということは、すでにユーア氏がいつていることである」とのべ、注75で「そこでは工場主たちのこのビンダロスと同時に工場主たちに、彼らの大部分は自分たちが使っている機構について少しも理解していないという証明書を与えている」(MEW. Bd. 25. S. 400, 485 ページ)とのべている。マルク

スは、ユーアの記述から、資本の科学に対する利用態度、資本家と産業管理者との相違、などをみてとっている。

(32) 工場における副次的作業

ユーアは、このあと、工場における副次的作業について、「動力は、通常の工場の仕事の他に、多くの雑多な骨折り仕事を行なっている」(p. 44) とのべ、物資の運搬、リフトの解説に多くのページをさいて第1章をおえている。

IV. 第1巻第2章「製造業の配列と関連」の分析

第2章「製造業の配列と関連」は機械的技術と化学的技術の分類を行なっている

(1) 労働、科学、資本の役割

すでにみたように、ユーアは機械的体系と道徳的組織、商業的効率の三者の関係を考察したあとで、労働、科学、資本の三つの力について、「三つの別々の力、すなわち労働、科学、資本は製造業の活力のために共同して働いている。労働は動くことを、科学は指揮することを、資本はささえることを予定されている」(p. 55) とのべている。

(2) 機械的技術と化学的技術の区分

ユーアは、機械的技術と化学的技術との区分を、「原料の外形を変えるか、あるいは内的構成を変えるかに応じて」(p. 55) 行なっている。そして、この各々を、鉱物、植物、動物の三つの部門に区分する。

(3) 機械的製造業の分類

しかし、この区分によれば、「羊毛製造業と綿製造業とは、近くにあるけれども、動物界と植物界という二つの別々の区分によって分離して考え」(p. 56) なければならない。したがって、「機械的製造業を分類する真に理学的な原理は、変形の目的となっている物質の一般的属性の秩序にそれを配列することである」(pp. 56-57) として、「機械的力が作用させられるいくつかの属性」(p. 57) を基準に、つぎのような分類を行なっている。これらの分類

は、決して体系的なものとはいえないが、当時の産業技術のあり様を示すものとして参考となる。

I. 可分性 (pp. 57-60), (1) 微粉碎 (pulverization), (2) 粉碎 (trituration), (3) 中ぐり, (4) のこひき, (5) やすりかけ, (6) 引き裂き, (7) 表面剥離, (8) 分裂, (9) 平削, (10) 丸削, (11) せん断, (12) 粒化, (13) 蒸留, (14) 昇華, (15) 爆発, 発破, (16) 土の粉末化, II. 非浸透性 (p. 61), III. 透水性 (p. 61), IV. 凝集性, 延性, 可鍛性 (p. 61), V. 惰性, 重力 (p. 61), VI. 弾力性, 粘り強さ (p. 62), VII. 可溶性 (p. 62), VIII. 結晶性 (p. 62)。

(4) 化学製造業の分類

化学製造業の分類は、材料にしたがって、I. 鉱物材料, II. 植物材料, III. 動物材料に区分している (p. 63)。その各々のくわしい内容は、のちに出版された『技術、製造業、鉱業辞典』に示されており、ユーアの分類が産業技術の実態にうらづけられていることが理解できる。ちなみに、この『辞典』のドイツ語版は、マルクスによって1851年にロンドンで抜粋(ノート B-56)され、『1861～1863年草稿』に利用されている。すなわち「綿紡績」(Baumwollspinnerei, 英語版の cotton manufacture の項目のドイツ語訳)の項目はノート XIX-1175に要約利用され、「ボビンネット」(Bobbinnnet, 英語版の lace manufacture の項目のドイツ語訳)の項目は、ノート XIX-1177に要約利用され、「蒸気機関」(Dampfmaschine, 英語版なし)の項目はノート XIX-1202, 1203に要約利用され、「鉄道」(Eisenbahnen, 英語版なし)の項目は、ノート XIX-1203に要約利用されている。さて、ユーアによる化学製造業の分類は以下のとおりである (pp. 63-66)。

Ⅰ. 鉱物材料 ①金属材の技術と製造業。1. 貴金属の抽出, 純化, 合金, 塩類。2. 銅の溶解, 合金, 塩類の技術。3. 鉄の溶解, 合金, 塩類の技術。4. 鉛の溶解の技術。5. スズの溶解の技術。6. 水銀の溶解の技術。7. 亜鉛の溶解の技術。8. ビスマスの溶解の技術。9. アンチモニーの溶解の技術。10. コバルトの溶解の技術。11. ニッケルの溶解の技術。12. マンガンの溶解の技術。13. ヒ素の溶解の技術。14. クロムの溶解の技術。15. 他の金属, カドミウム, ビスマスなどの抽出技術。②土, 石材質の技術と製造業。1. 石膏, モルタル材料。2. 陶器材料。3. ケイ素, ガラス製

造業。③可燃材の技術と製造業。1. イオウ、硫酸製造業。2. 石炭、石炭ガス製造業。3. こはく、石油、れきせい、アスファルト。④塩類の技術と製造業。1. 岩塩、食塩、塩酸、塩素、染色技術。2. みょうばん製造業。3. 天然炭酸ソーダ製造業。4. 苛性カリ製造業。5. アンモニア塩の製造業。6. 硝酸製造業、爆薬製造業。7. ほうしゃ製造業。8. 硫化マグネシウム製造業。II. 植物材料。1. 砂糖の抽出と精製技術。2. スターチの抽出と精製技術。3. 人工ゴム製造技術。4. 油の抽出・精製技術、石けん製造業。5. 揮発油の抽出・精製技術。6. ワックスの精製・染色技術。7. ロジンなどの樹脂の抽出・精製。8. 弾性ゴムの抽出、防水布の製造業。9. ふし（五倍子）の抽出、インクの製造業。10. 植物染色材の抽出。11. 発酵技術、ワイン・ビールなど。12. 発酵技術、ジュース、ヴェネガーなど。13. 発酵技術、パン製造業。14. 揮発油、アルコール（木材分解）。15. 植物の分解、化学技術としての農業。III. 動物材料。1. ゼラチンの抽出・精製技術。2. パター・チーズの抽出技術。3. 皮をレザーにする技術。4. 獣脂ろうそく技術。5. 獣脂、石けん製造業。6. 顔料、カルミン。7. 動物性食料の貯蔵法。8. 火による動物質の分解、塩化アンモニア製造業。」

ユアの化学製造業についての分類は、労働対象の共通性による区分であり、それにくらべて機械的技術についての分類は、労働対象から相対的に離れたうえでの、自然力利用（機械的・物理的力の作用の属性）にもとづくものである。さきの『辞典』をみると、製品をつくる過程にしたがった作業と化学装置や機械すなわち労働過程と労働手段の説明に多くが費やされている。このように、当時のユアにおいては、産業技術についての分析視点が、様々な角度から立てられており、必ずしも統一されたものとはなっていないようにおもわれる。しかし、『辞典』は多くの図版を用いて化学装置の分析を行っており、マルクスの「労働手段の脈管系統」という規定も、これらの摂取にもとづいていると推定されるのである。

- 1) *Technisches Wörterbuch oder Handbuch der Gewerbskunde, In alphabetischer Ordnung. Bearbeitet nach A. Ure's dictionary of arts von K. Karmarsch and F. Heeren.* 3. Bde. Prag. 1843-1844.

V. 第3巻「工場制度の道徳的経済論」の分析

第3巻「工場制度（自動体系）の道徳的経済論」は、中心に工場法をめぐる諸問題をあつかい、工場法の規制と労働組合を批判することに主眼がおか

れている。あわせて、工場労働の特質、手織工の惨状、機械と賃銀、児童労働、労働者の「反抗」と自動機械の発明などのテーマをあつかっている。第1巻第1章「製造工業の概観」とならんで本書の特色を示しており、マルクスやエンゲルスの批判の利用が集中している部分である。

(1) 工場に対する議会の十字軍

「他の労働諸階級にくらべての工場職工の個人的快適さについて。または工場が提供できる娯楽の手段と対照して考察される工場労働の量と質。この問題についての不満、偏見、立法の歴史」という長い表題をもつ第1章は、「工場に対する議会十字軍」を反批判するという本書の目的をのべるところからはじまっている。

「中世の無法時代を通じて、そのあらゆる侮辱と無礼な形態をとってあらわれた、地方の紳士（貴族）が都市民にいただく、古くからの輕蔑の感情は、今でもわが貴族の多数の胸に深く食い込んでおり、貴族の秩序を称赞する人々によってはぐくまれ、工場に対する最近の議会十字軍にはっきりと示されている」(p.277)。

(2) 工場制度と労働者

ユーアは、議会における「人道主義者」を批判する一方で、労働者のストライキをつぎのように弾劾している。

「手職人は雇用と賃銀の変動をともなう、きつい仕事のかわりに、安定した賃銀とより軽い、連続的の仕事にとりかえた時、彼はすきなときに、仕事を止めるという古い特権を放棄しなければならない。なぜなら彼は、それによって、工場全体を混乱させる（工場全体の運行をさまたげる）からである」(A) (p. 279)。「労働者は、これまでのように、彼らの雇い主の繁栄をみて不平をいったり、それをだいなしにする極端な手段を共同でとるのをやめて、感謝と私利のあらゆる原理にもとづいて（自分の利益として）、彼らの労働から生まれた成功を喜ぶべきである」(B) (p. 279)。「そして、すぐれた労働者は、その条件を新しい工場の監督、支配人、さらには協同出資者のそれに前進させ（の地位を得て）、同時に市場における仲間の労働に対する需要を増大させるであろう（彼らの仲間の多数に職をあたえるであろう）」(C) (p. 280)。「もし、職工のあいだの誤った見方から生れる暴力的な衝突や妨害がなければ、いままでもよりも工場制度はずっと急速に、そして全ての関係者にとってずっと有益に発展したことであろう」(D) (p. 280)。「そして、熟練した労働者がゆたかな所有者とな

る（満足な——フランス語版なし）例を、もっとひんばんに示したであろう」（㉔）（p. 280）。

ユーアはここで工場労働者に対して、「すぎなときに仕事を止めるという古い特権を放棄しなければならない」という一方で、ストライキがなければ工場制度はもっと急速に発展したであろうと展開する。そして、労働者に対して、工場の所有者になる以外にすくわれる道はないというのである。さて、マルクスは『1861～1863年草稿』ノート XX-1264, 1265 において、まず㉔部分を引用して、「機械は労働者に労働の連続性を押しつける」（crp. 558, 269 ページ）とのべ、さらに㉔㉕部分に対してこう語る。

「だから、労働者は彼らのストライキ等々によって自ら損を招いている、なぜならそれらの行為は機械制作業場がいっそう急速に発展するのをさまたげるからだ、というのである。他方では、逆に、ユーアは、労働者はストライキや団結などによって発明や【工場】制度の拡張を呼び起こし、その発展を速め、そのことによって自ら不利を招いているといて、彼らを非難する。（ついさきほどは、彼は、労働者は『仕事を中断する特権』を放棄しなければならないといった）」（crp. 558, 270 ページ）。

こうしてマルクスは、ユーアの叙述のなかに「機械は労働者に労働の連続性を押しつける」ことをよみとり、さらにさきに指摘した矛盾を鋭くえぐり出している。さらにノート XX-1265 では、㉔㉕部分に対してつぎのように評註している。

「そこでさらに、ユーアが労働の駆逐を、機械による労働の放逐を、それと関連する労働の減価をどう弁明しているか、他方では、労働の再取引をどう描いているかをみることにしよう。というのは、こういう反撥と誘引とは、【工場】制度の特徴をなすものだからである。【工場】制度がより急速に発展することの利点としてユーアが描くのは、若干の労働者がそれだけ多く資本の下士官として雇われ彼ら自身の階級に敵対する立場におかれるということ、いいかえれば、まさに自らが労働者の搾取者に転化するという労働者のなりあがり者の例が増加するだろうということなのである。しかし彼がとくに【指摘する】のは、それがいっそう多くの工場労働者を生みだすであろう、という点である。……」（crp. 559, 272 ページ）。

マルクスは、「労働者のなりあがり者の増加」に注目するにとどまらず、「仲間の労働に対する需要を増大させ」（p. 280）するという言及に、労働の「反撥と誘引」という工場制度の特徴をみいだしているのである。『資本論』で

は、「機械とストライキ」についてのユーアの矛盾した記述の一例として⑩部分をとりあげている (MEW. Bd. 23. S. 460, 572 ページ)。なおエンゲルスも『イギリスにおける労働者階級の状態』で、「われわれは、ブルジョアジーがその選ばれた下僕、ユーア博士の口をつうじて、いったいどのように語るかを聞くことにしよう」 (MEW. Bd. 2. S. 389, 400 ページ) として、この項目を要約している。

(3) 二種類の労働者

ユーアは、こうした基本的原理の力を「綿精紡工が偏見と激情によって目がくもり、正しく理解していないことは、深くなげかるべき」 (p. 280) であるとして、織物製造業に働く、二種類の相異なる労働者について、つぎのようにのべている。

「織物製造業は、二つの区別される部門からなっている。一つは労働者に属する小さな独立の機械の多数によって行なわれ、他は工場主の財産である機械の連結 (完全な) 体系によって行なわれる。前者については、モスリン編と靴下編がその例である。後者は、ミュール紡績機と力織機である。第一の種類の労働者は、国の広い範囲にちらばっており、仕事と賃銀を求めて互いに競争者である。互いに共謀することはまれで、その雇用主に効果的に反抗することはない。しかし、ある程度、彼らが反抗しようとするならば (成功したとしても)、彼らは彼らの主人の資本と同じ程度に、彼ら自身の資本を固定しなければならない (損害をあたえることになるだろう)。すなわち、工場主が織布用の糸 (原材料) に投下した資本を失うくらいに、彼らの使用されない織機 (紡績機械) や織機工場 (作業場) によって、貨幣の利子を失うだろう。後者の種類の職工は、必然的に大きな団に連合され、さらに資本は機械や仕事場に投下されていない。彼らがストライキをやろう (反抗する) とすれば、彼らは、すぐにまとまり、打撃をあたえることができ、仕事を止めることによって、しばらくのあいだは賃銀の損失をうけるだけである。一方、彼らは、その主人に対して、彼の支払った投下資本、地代、税に対する利子に損害をひきおこす。そればかりか、わが国のような湿った気候では、休止によって金属機構の微妙な作動部分に損害をあたえる。マンチェスターのいくつかの綿工場では、年に投下資本の利子が五〇〇〇〜一〇〇〇〇ポンドになるものがある。この利子の損失にさきの資本の利用から相当に生ずる利潤を加えれば、職工が工場主や国の商業にあたえた、有害な陰謀の大きさをある程度評価することができる」 (pp. 280-282)。

ユーアは工場労働者と小独立織工を比較して、工場労働者によるストライキの条件とその「損害」の大きさを強調している。マルクスは『1861～1863年草稿』ノート XX-1267 で、この部分を引用して、「剰余労働の着服から生まれる『利子』と『利潤』の喪失があたかもこの連中から彼らの財産とその自然の果実とが盗まれることであるかのように論じられている」と評註している。また、『資本論』第1巻第13章第3節「機械経営が労働者に及ぼす直接的影響」において、「機械の物質的な損耗は二重である。……他方は使われない剣が鞘のなかで錆びるようにその非使用から生じる」(MEW. Bd. 23. S. 426, 527 ページ)として、傍点部が引用されている。このように『資本論』で、機械や工場経営の具体的問題を、ユーアから利用している例は多いのである。

- 1) 全集版の注 145 の邦訳「誘因……休止によって金属性の機構の微妙な部分に生ずる損傷……」は誤訳である（傍点は引用者）。

(4) 工場法の成立経過

ユーアは、つぎに工場法の成立経過についてつぎのようにのべている。

「……これらの騒動や不満の結果、工場における労働時間を規制するサー・ロバート・ピールの法律が 1818 年に通過した。しかし、同じような反抗の風潮があらわれつづけ、1825 年には、第三の法律が通った。サー・J・C・ホブハウスの指揮下での最後のものであった（の名の下であった）」(p. 288)。

そしてさらにサドラー報告（1832 年）、タフネル報告（1833 年）、アシュリー-の十時間法案（1833 年）について言及している。マルクスは『1861～1863年草稿』ノート XX-1265 でこの部分を引用して、「ユーアは、国家の側からの労働日の規制が、一二あるいは一〇時間法等々の存在が、まったく労働者の『反逆』に、彼らの組合（それを彼は論駁して『結社』と呼ぶ）に負うていることを認めている」(crp. 506, 272 ページ)と評註している。ユーアが、工場主の立場から「騒動や不満の結果」、工場法が制定された経過を指摘している点をマルクスは評価しているのである。これに対してエンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』は、ユーアがとりあつかっている同じ事情を、

「労働者の反抗」の面からだけではなく、「博愛主義者」、「トーリー党の人道派」、「生粋のブルジョアであるウィッグ党」のそれぞれの利害の面から分析している (MEW. Bd. 2. S. 391-S. 392, 402-403ページ)。

(5) 児童労働について

ユーアは工場法で焦点となっていた児童労働について児童労働の「悲惨」さを否定して、「独特な弁護論」を展開する。

「私はマンチェスターやその周辺にある工場を多数おとずれたことがある。……児童が体刑を加えられたり、あるいは不機嫌な様子をしているのを一度だって見たことはない。児童たちはみんな陽気で、機敏で自分の筋肉の軽快な動きを喜び、彼らの年齢につきものの動きやすさを楽しんでいるようにおもわれた。勤労の実際の姿は、私の心に悲しい気持を起こさせるところか、私にはつねに気持をうきたたせるものであった。……これらの元気のいい妖精の労働は、練習しだいで気持のいい軽妙さを体得できる遊戯(習慣)と同じようにみえた」(p. 301)。

このような度をこえた「弁護論」は、当時から反撃をうけた。たとえば、C. ウィング¹⁾『工場制度の害悪』は、皮肉をこめて、「児童たちは、あなたにとっては遊びであっても、私たちにとっては死ですというはずである」という批判を行なっている。またエンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』も、長文を引用して、こう批判している。

「(あたりまえのことではないか。まるで、かたくなると同時に締めりのなくなった肉体には、あらゆる筋肉を運動させることは直接必要ではないかのような言い方である) だが、ユーアは、このような瞬間的な刺激が二、三分後には消滅しないかどうか、待っているべきであったのだ。またそのうえにユーアは、こんなようすを五時間ないし六時間の労働のすんだあとの昼間だけは見ることはできたが、しかし、夜間には見ることはできなかったのだ。)」(MEW. Bd. 2. S. 390, 401 ページ)。

ユーアの「弁護論」は、現代の論者によっても「ばかばかしい論戦²⁾」の典型と指摘されるユーアにおける「死せるもの」である。

- 1) C. Wing, *Evils of the Factory System*, 1837, p. liii.
- 2) *Dictionary of Scientific Biography*, Vol XIII, p. 547.

(6) 十時間法について

ユーアは、十時間法について、つぎのように批判する。

「……全体の論争において最も奇異な状況は、十時間法について、博愛主義者の十字軍の指導者の支持理由と、工場地区の職工自身の支持理由とが異なっていたことである。ロンドンと農業地方では、精紡工組合は、白人奴隷やキャリコの王冠をいただくマモン（物欲の擬人的偶像——引用者）の祭壇に毎年ささげられる児童のいけにえなどというロマンチックな描写によってお人好をだますことに完全に成功した。しかし、ランカシャーでは厚顔なうそをつくこと（宣伝すること）はあえてできなかった」（p. 302）。「十時間法を（非常に熱心に——フランス語版のみ）支持して、目につきやすく公衆の前に出されている理由は、全て根拠がない——綿工場の児童は労働によって傷ついておらず、一般に過度労働でもない」（p. 305）。

ここに「十時間法支持には根拠がない」という本章の目的が明白に語られている。ユーアは、十時間法支持勢力である「議会の博愛主義者」と労働者側をとともに批判し、さらに両者のあいだを離反させる必要があった。そのために両者の十時間法支持の理由が異なっていることを問題としているのである。さて、マルクスは『1861～1863年草稿』ノート XX-1265 でこの部分を引用し、さらに『資本論』第1巻第8章第7節「標準労働日のための闘争、イギリスの工場立法が諸外国に起こした反応」において、これをさしてつぎのようにのべている。

「工場哲学者ユーアも『労働の完全な自由』のために男らしく戦った資本に向かってイギリスの労働者階級が『工場法という奴隷制度』を自分の旗じるしにしたということを、労働者階級のぬぐい去ることのできない汚辱として非難するのである」(MEW, Bd. 23, S. 317, 393 ページ)。

ユーアの原文には、マルクスがのべている文面は直接あらわれていないけれども、ユーアの趣旨としては、労働者が社会に対して「不当な児童労働像」を描いて、工場法の根拠を宣伝したことに批判を加えている点を、マルクスなりに利用しているようにみえる。

(7) 工場労働についての「偏見」

ユーアは、蒸気機関と工場労働の連続性に関連して、工場労働についての「偏見」があるところのべている。

「工場労働に関する全ての共通の偏見に関連して、『蒸気機関の休まない動き』につ

ながっているためこれだけ退屈であきあきする職業はないというほど根拠のないものはない。……事実は、蒸気機関とつながっているというその理由で、仕事は連続的でないのである(正しくは、蒸気機関と歩みが一致しているので、労働者は時おり休むことができるのである)。全ての製造業の雇用のなかで、レース編(毛糸編)や靴下編(チュール織工場)などの蒸気機関が使われていないところが、(最もあきあきし—フランス語版なし)しかも連続的である」(p. 309)。

ユーアはさらに、工場労働者は「すきなときに仕事を止めるという古い特権を放棄しなければならない」(p. 279) とのべていたのに対し、ここでは蒸気機関のために工場労働は「連続的でない」という。そこでマルクスも『1861～1863 年草稿』ノート XX-1264 で、この部分をさして、「彼は【機械を】監視する労働は労働ではなく、労働者が指をつかって運転しなければならないときの諸契機だけが労働であるとみているからである」(crp. 558, 270 ページ)と評註を加えている。ただし、「蒸気機関と、工場労働の連続性」という問題に対して注目しているわけではないようである。

(8) イギリス綿工業の国際的位置

ユーアは、大陸諸国と比較して、イギリスの綿工業における労働時間、賃銀、利潤などを検討している。

「わが工場住民の福利が求めている進歩的發展を、イギリスの綿工業が維持できるかどうかは、外国の工場で、その機械と(労働者の——フランス語版のみ)熟練の劣勢を、やがて低賃銀と長時間労働で補うかどうかにかかっている。この補償がすでにある程度起っており、結局はさらに大きくなるということは、外国市場向けの多くの製造業者によって主張されている」(p. 314)。「しかし、カウエル氏は、彼の補足報告のなかで綿紡績の非常に入念な分析によって、イギリスの賃銀は、ヨーロッパ大陸の賃銀とくらべると職工にとっては高いかもしれないが、各機械が日々遂行する仕事量が(機械について働く——フランス語版なし)職工の比較的の高い価格にみあってなおあまりあるほどに大きいから、資本家にとっては実質的に低い、ということを証明しようとしてとめている」(pp. 314-315)。

ユーアはイギリス綿工業に対する大陸諸国からの追い上げを強調して、利潤の低下について言及している。そして、イギリスの賃銀は大陸とくらべて高いけれども、仕事量との関係で、したがって資本家にとっては低いという

報告を引用している。しかし結局、満足なデータは得られないとしている (p. 315)。この部分は、マルクス『1861～1863 年草稿』ノート XX-1266 で「イギリスの労賃は、たとえば、大陸におけるそれよりも高いが、労働の生産性との関係でいえば、相対的に低い、ということがありうる」(стр. 561, 275 ページ) と評注されている。

(9) 課業の最低限

ユーアは、話題を「機械の改良と賃銀との関係」にかえて、つぎのようにのべている。

「精紡工は、綿作業では最も主導的で重要な職工である。精紡工は、全ての他の準備過程（「準備」とよばれるものは、打綿、梳綿、粗紡などからなっている）がそのために行なわれるものである。精紡工は、準備過程をおえた一定重量の綿をうけると、それと引きかえに彼は一定の時間内に（決まった等級の細い——フランス語版なし）より糸、紡糸の一定量を返さなければならない。そして彼は、彼が返した全製品に対してポンドあたりいくらというかたちで支払いをうける。もしその仕事（生産物）が品質の点で欠陥があるときは彼は罰金を課せられる。もし、量の点で、一定時間に対して決められた最低限に達しないときは、彼は解雇され、より熟練した職工がやとわれる（とりかえられる）。彼の紡績機械の生産能力は正確に計られている。そして労働への支払率（報酬）は、その機械の生産能力の増大にともなう減らされる（比例してではない）。この機械が連続的に改良されると、精紡工の収入にどのような効果があるか？……賃銀は連続的に下落するというのは誤りかどうかは、『英国綿工業論』を参照せよ」(pp. 316-317)。

ここでユーアは、精紡工の「課業の最低限」についてのべ、さらに「労働への支払率は、その機械の生産能力の増大にともなう減らされる」とみとめている。マルクスは、『1861～1863 年草稿』ノート XX-1266 で、以上の叙述を「割当て仕事での〔課業の〕最低限および一般に賃銀の決定についてはユーアのつぎの箇所」(стр. 562, 275 ページ) として引用し、「労働への支払率は機械の生産能力の増大に比例してではなく減らされる」という部分に関連してこうのべている。

「この最後の緩和された状況があらわれるのは、生産物の価格がその価値の減少に比例しては低下しない場合、また労働者が増大した生産性の一部を自分のものにしう

るほどに労働需要が強い場合である。あるいは、機械の生産性の増大といっしょに労働の強度も強まるという場合、したがって労働は一定の時間においてみるときもはや同じではないという場合である」(стр. 562, 276 ページ)。

このように、マルクスは、ユーアの叙述を、相対的剰余価値論における、「個々の機械の生産力向上と賃銀との関係」分析の素材として利用しているのである。

(10) 機械の改良と賃銀との関係

ユーアはひきつづいて、機械の改良と賃銀との関係について考察をすすめる。

「五〇〇紡錘の太糸紡績用のミュール紡績機がうまく導入されて六〇〇紡錘(のミュール機——フランス語版なし)がまさにすえつけられようとしていると考える。この増加で、機械の生産能力は五分の一ふえるであろう。この場合は、精紡工の賃銀率は以前と同じように支払われないであろう(引き下げられるであろう)。しかし、それが五分の一減らされることはないからこの改良はあたえられた同じ時間数についての彼の収入をふやすだろう。この改良から生ずる利益は全て、工場主と職工のあいだで分配されている。前者の利潤も後者の収入もそれによって同時にふえている。さきの叙述(計算)は、一定の修正を必要とする。(今えがいた性格の——フランス語版なし)機械(の構造——フランス語版のみ)の改善は、資本家の利潤とともに、職工の収入を増大させることははっきりしているが、さきの結論に反対する人はつぎのようになるであろう。すなわち(命題を証明するために——フランス語版なし)特別の場合がえらばれており、それをのべるに当って重要な要素がぬけている。つまり、精紡工はその追加の六ペンスから、追加の(少年少女の——フランス語版なし)手伝いにくらか払わなければならないという点である。この控除は考慮に入れなければならない」(A) (pp. 320-321)。「改良された」機械の改良の効果は、一定の成果を得るためには、前と同数の成人を雇う必要がないというだけでなく、ある部類の個人を他の部類の個人のかわりに、熟練度の低いものを高いもののかわりに、子供を大人のかわりに、女を男のかわりに用いるようにする。これ(全てこれらの変化)は賃銀率のあらたな変動の原因になる」(B) (p. 321)。「これは、成人の一部を解雇し、その数をその労働に対する需要にくらべて過剰にさせることによって、成人の収入高を下げることであるといわれている。それは、確かに、児童の労働への需要を増大させ、その賃銀率を増加させている。もしも、綿製造業がなんらかの障害にぶつかったら、いや、綿製造業の持続的な拡張は綿製造業がたえず放り出すその同じ成人労働者たちを再雇用するのに十分でないというだけでも、ひとは機械の改良は『賃銀を引き下げ

る』傾向があるということが出来るだろう。」(㉔) (p. 321)。「大ブリテンの綿業地帯の社会状態（工場都市の住民）にとってさいわいなことに、機械の改良は漸進的であり、あるいは少くとも大変じょじょに普及している」(㉕) (p. 322)。「したがって、製造品の値下げは漸進的であり、価格の低下から生ずる需要増大は、たえず価格をますます多数の消費者の資力のおよぶ範囲におくので、同じように漸進的であり、成人労働者に対する需要をささえ、それによって、彼をとりかえる作用をする（排斥する）機械の改良の効果を相殺する。したがって、今までのところ、彼らの賃銀のめだった減少は起きていない」(㉖) (p. 322)。

ユースは前半部分において、機械改良の効果を正しくいいあて、成人・熟練労働を排除する傾向、賃銀を引き下げる傾向をみとめているけれども、後半部分で、機械改良が漸進的であるから問題は緩和されると「弁護論」を展開していく。マルクスは『1861～1863年草稿』ノート XX-1266 で、さきにひきつづいて㉔部分を引用してこう評註している。

「紡績機械の生産性の増大にともなって充用される児童の数が増えるが、彼らに支払うのは紡績工なのである。だから、たとえば比較表が示すような彼の賃銀のみせかけの増加は消えてしまい十中八九は減少するという例をユース氏自身が引いている」。「そして、さらに、ユース自身が認めているように、この未成年者の手伝いの増加は成人労働者の一部の『更迭』をともなっている」(crp. 562, 276 ページ)。

またノート XX-1265 では、㉕部分を引用して、「ここでは、その過程は正しく記述されている。機械が成人労働者をたえず放り出しつつ彼らをふたたび『再雇用』する、つまり再度吸引するためには、そのためだけでも、機械〔制生産〕は持続的な拡張を必要とするのである」(crp. 560, 273 ページ)と評註し、機械による労働者の「排出」と「吸引」の条件を分析している。これに対して、後半部分の㉖は、それぞれノート XX-1264, 1265 で、抜粋されているだけである。『資本論』にいたると、第1巻第13章第5節「労働者と機械との闘争」において、「労働手段が労働者を打ち殺すのである。…しかし、大工業そのもののなかでも、絶えず行なわれる機械の改良や自動的体系の発達は同じような作用をするのである」(MEW. Bd. 23. S. 456, 565 ページ)として、㉕部分を引用している。また、同じ節で、「機械の急速な発達が労働者にとってどんなに有利であるかを長々と説教したあとで、彼は労働者たちに向かって、労働者は自分の反抗的態度やストライキなどによって自

分で機械の発達を速めるのだ、ということを警告している」(MEW. Bd. 23. S. 460, 572 ページ)として⑩部分を引用し、ユーアの「弁護論」の矛盾をついている。このように、ユーアの叙述には、機械改良の傾向を正しく分析している部分と、「弁護論」的部分とが共存していることは特徴的であって、そこから「生けるもの」と「死せるもの」をよりわけ、評価することが必要である。マルクスはこの立場にたって、「生けるもの」はとり出し、「死せるもの」をその階級的基盤にまで下がって批判していくのである。

- 1) このことは、ユーアの同時代人、P. Gaskell, *Artisans and Machinery*, 1836, p. 353, 357 が指摘しているところである。

(11) 機械に対する組合の対応策

ユーアは、「機械による、労働の価格に対する真の効果についての職工の誤解が、ストライキ（陰謀と労働中止）の主な原因である」(p. 326)としてつぎのようにのべている。

「製造業の改善された能力から商品価格が下げられると、より多くの商品が消費されるであろう。したがって、より多くの働き手が、いくつかの副次的部門で求められ、綿業作業（綿製造業）の全ての部類の賃銀が前よりもよくなるであろう。綿紡績ではミュール紡績機が大型化して、働き手がつねに十分いるので、労働の賃銀を下げることは可能であろう。……精紡職工たちは、働き手が大変過剰である（多い）のは、（かならず——フランス語版のみ）彼らの賃銀を引き下げようということを知っているので、失業した彼らの仲間をアメリカに送り出すために醜金しあっている」(pp. 326-327)、「実際に、労働組合は、失業した組合員が困窮のためやむをえずあまりにも低い賃銀（価格）で働くということのないように、彼らをたすける一定額の支払義務を組合規約で定めている」(p. 327)。

ユーアは、前半部で、ユーアなりの「補償説」を展開し、後半部で機械大型化による過剰労働力の発生と、それへの労働組合の対応——移民促進、失業者扶助などの事実をのべている。後半部は、『1861～1863 年草稿』ノート XX-1266 において、評註なしで抜粋されている。

- 1) 「補償説」の系譜におけるユーアの位置づけについては、つぎの文献を参照。Carl Ergang, *Untersuchungen zum Maschinenproblem* (Karlsruhe, G. Braunsche

Hofbuchdruckerei und Verlag, 1911) S. 86 ff.

(12) 十時間法要求への批判

ユアは労働者の十時間法要求への批判をつぎのようにのべている。

「水力や蒸気力に助けられて働いている職工が、十時間以上働くことを免除する特権を要求する口実（働きたくないと決心させる理由）は、推量困難である。彼らは自分たちの労働を大工や（レンガ工——フランス語版なし）、石工などといった比較的小さな部類の職人たちの労働と比較して、これらの職人は朝六時から晩の六時まで働くが、それぞれ一時間の食事休みを二回とっている、という。この部類の労働者は、彼らの労働がもっぱら筋肉の力で遂行される点で、また彼らは少なからぬ費用をかけて長い徒弟期間をつとめあげているという点で、大多数の工場職工と（物質的に——フランス語版なし）まったくちがっているのである。それにしても、工場労働者たちは、一日に一二時間から一六時間も働いてみすばらしい生活をまかなっている靴下編工や手織工、梳毛工、レース工、その他いろいろのおびただしい部類の家内職工たちのことをなんと思っているのであろうか。そして、これはたびたび大変小さな年齢からで、心に退屈で、からだに悪いという監禁状態ではないのだろうか。これらの利己的な理屈屋は、つぎの事実をみのがしている。すなわち、労働時間を減らし、その結果、より好ましい職業が提供する生活の手段を減らしてしまうならば、彼らはより好ましくない（骨の折れる）仕事につくための競争をふやすことになるという点、そして彼らは非常に有利な彼ら自身の労働を気まぐれに放棄するならば、結局は勤労社会全体に害をおよぼすことになるであろうという点である」（pp. 328-329）。

ユアは、手織工などの労働条件のより劣悪な労働者をひきあいだし、しかも労働時間短縮によって「より好ましくない仕事につくための競争をふやすことになる」という特異な論理を展開している。これに対して、マルクスは『1861～1863年草稿』ノート XX-1267, 1268 において、皮肉をこめて「資本家たちはなるほど公平無私である。／＼」、「ユアは理屈屋ではない。／」（стр. 564, 279 ページ）とのべ、さらにつぎのように評註している。

「こうした『小理屈をこねる』のは、ユアに期待することのできる限度を越えてさえいる。つまり、労働者が一二時間働くかわりに十時間働くときには〔生産性は同じままであり、新しい発明による増大はないものと仮定すれば〕、資本家は、同じ規模で生産を続けるためには、同時により多くの労働者を充用しなければならないであろう、そしてその結果、就業していない過剰人口が減少し、ひいては労働者間の競争が一般に減少するであろう、というのではなくて、反対に、より少ない労働者が同時に

雇用されそうして競争が増大するであろうというのだ。／ かりに六人の労働者が十時間働くかわりに [一二時間働いて] 毎日二時間の超過労働をするとすれば、彼らは、毎日一人の労働者に、一週間では六人の労働者に置きかわっている。ユーアの意見では、反対に、六人が補充されるのだから、六人が余分に充用されるのだ、とでもいうのであろうか。／」(срр. 564, 279 ページ)。

マルクスの批判も、労働時間短縮によって、「より少ない労働者が同時に雇用され、そうして競争が増大するであろう」というユーアの主張におかれている。ユーアにおける資本家弁護のこじつけへの批判である。¹⁾

- 1) なおユーアは、イギリスが大陸諸国より労働時間が短いことは競争上不利となることを十時間法反対の理由の一つにあげているが、工場主の J. Fielden, *The Curse of the Factory System* (London, A. Cobbett, 1836) p. 56, 70, 71, 72 はこれに批判を加えている。

(13) 「高賃銀」の根拠

ユーアは、工場労働者の「高賃銀」について、その根拠をつぎのようにのべている。

「賃銀がそんなに高い理由は、製品価値にしめる賃銀部分が小さいからで、けちな工場主によって、それが低く減らされると、職工は注意深くなくなり、賃銀の節約分によって補償される以上に仕事(生産物)の質をきずつけるのである。商品価値のなかで賃銀(働き手)の比率が小さいほど、一般に、労働の報酬は高い。……」(p. 329)。

ここでは、機械制生産にもとづく製品価値中における賃銀部分の低比率と「高賃銀」との関係が正しく客観的に分析されており、マルクスも『1861～1863年草稿』ノート XX-1266 で、評註ぬきで、この部分を抜粋している。

(14) 結合工場について

ユーアは、話題をかえて紡績と織布の兼営工場の優位性について、くわしく分析している。

「よく管理された紡績と織布の工場が一つの会社に結ばれると、作業の手順と調整がより精巧となり、(このような工場は——フランス語版のみ)資本と熟練は増大しているので競争の困難は増大する(競争を恐れなくなる)が、結果として利潤は高くなり、少くともより安全になる」(p. 330)。

マルクスは『1861～1863年草稿』ノートXX-1269において、これを抜粋している。ノートXIX-1189, 1199の結合工場についての統計分析は、ノートの順序が前後しているけれども、ユーアの記述に示唆されたものであると推定される。

(15) 手動機械労働者の惨状

兼営工場の優位性を強調したユーアは、これとくらべて手動機械で働く労働者がいかにひどい状況にあるかを描き出す。

「他方で、手で動かされるただ一台の織機とか機械に要約される技術の、工場ではない過程は、全ての近隣諸国の職工でも手が出るもので、彼らの利潤はやがてそこに投下された資本（の使用）にみあった最低限に減少し、彼らの賃銀は最も低く生活している国々のそれに引き下げられる（より安い費用でくらしている国々のそれより多くはないであろう）。靴下の製造は、そうした痛ましい実例を提供している」⑧（p. 332）。「さらにつぎのことをいっておく必要がある。手労働は職工のわがままから多かれ少なかれ中断される。それゆえ手労働は、一定の（規則正しい）力で動かされる機械の生産物とくらべられるような、平均的な年、あるいは週生産物をあたえることは決してないということである。このため（自宅での）手織工が週の終わりに、もし彼らが織機を毎日一二時間から一四時間、激発的に（労働を倍化して）休まず同じ速さで動かしたなら生産できたはずのものの半分以上を生産していることはめったにない」⑨（p. 333）。「工場委員会で行なわれた、つぎのようないたむべき証言は、工場の動力で動かされる機械（織機）につきそっている、もっとなげかれるべき労働者とくらべて、いわゆる独立した手労働者の状態がいかに卑劣であるかを示している。後者こそ、サドラー氏の党派が前者にひどくそいだ同情を必要とするものである。綿の靴下編工の正味のかせぎは、現在週四シリングから七シリングである。しかし、大多数（の労働者が得ている賃銀——フランス語版なし）は、これら二つの賃銀の低い方にも達しないのである」⑩（p. 334）。「しかし、みな品行方正で勤勉な人々たちである。一八三二年九月、靴下業者のあつまりでの『彼らの平均賃銀は、週六シリング六ペンスをこえることはない』という彼らの公衆むけアピールは完全に根拠がある。この額で、一人の男、妻、子供がやしなわれねばならない。だから、彼らの多くは、ぞっとするほどに悲惨で、ぎりぎりの必需品すら入手できない状態である。ある人々は、毛布もシーツもなく、わらのなかでねている。レース編とよばれているボンネット（テュール織）の刺繍は、工場外の家内労働でわれわれの命題をいたましいほどに示している。ほとんどが大変若い娘で、一五万人以上の女子労働者が大ブリテンではこの職業でくらしている。仕事はまったく家内（自宅）で行なわれる。しか

も、レースづくりの他のどんな部門にもまして器用さを必要とし、そして大変な仕事であるのに、支払いが一番少ないのである。」(㉑) (p. 335)。『彼女たちは、朝早くから仕事をはじめ夜おそくまで働く。そして、その長い一日の仕事のあいだずっとレースがかかっている編機のうえに身をかかめている。そして頭は編機の五—六インチ内にいつもおいており、そのはしが胸の下部をおさえている。この習慣から一般的に生れる効果の一つは、近眼であり、たびたび弱視となる。そして肺病の傾向であり、手足がゆがみ、姿勢を固定することからくる全般的な衰弱である』(バウアー氏の報告、ノッチングム、一七ページ)。工場労働の支配と連続性に対するけざらい、見せかけの上品なプライド、婦人の地位という誇示(一段階上の階級に属しているようにみえる自尊心と結びついている、工場の連続的労働に対する嫌悪や工場の規制への反撥)、これらが若い婦人をして、たびたびその安楽と健康を犠牲にして、家内(自宅)でレース刺繍に従わせる理由である。ある少女が質問にこたえてのべているには、『収入はそれほど得られないけれど、工場よりこの方が好きです。家では自由があり、こんなものですが、食事を安心してとれるのです。』(㉒) (p. 336)。「これらの貧しいもののあいだには、何の団結(相互の連絡)もない。彼らは、じめじめした別々の地下室で眼がみえる(日の光がゆるす)かぎり働く。彼らはひとりひとり自分の労働の成果を原料の所有者にもって行く。彼は当然最も安い申し値に応じるであろう。」(㉓) (p. 338)。

このようにユーアは、工場労働と対比して、家内で行なわれる手動機械労働者の悲慘さを描き出しているが、もちろんそのよってきた原因、機械との競争や機械によって駆逐された労働力の逃げ場所などについては口をとぎしている。ユーアのこうした「弁護論」に対しては、すでに同時代人の P. ギャスケルが批判している。¹⁾すなわち、ユーアが一方で機械の傾向は成人男子労働者を排除するといいいながら、その労働者がどこへ排除されたかを問わず、それと切り離して他方における手織工の惨状を描き出しているというのである。マルクスは『1861~1863年草稿』において、まずノート XIX-1198, 1268 で㉑部分を抜粋しさらに㉑㉒㉓部分を引用して、「この最後の記述がどんなに工場制度の自尊心をくすぐるにせよ、ユーアがそれを一般化して論ずるのはなんとも下らない」(crp. 565, 281 ページ)と評註している。また、ノート XX-1268 で㉑部分を引用する前でこうのべている。

「ユーアの功績は、彼が工場労働を賛美する目的で、工場外の労働者——彼ら自身、この形態にあって工場制度の一結果なのである——のいっそうひどい状態をひときわあざやかに強調したことであった。このように彼は、手織工の極端な悲慘を強調する

のであるが、その悲惨を、あたかも機械織布の結果でもまた自らその悲惨をあらためて食いものにする資本家たちの結果でもないかのようにあつかうのである」(cp. 565, 281 ページ)。

このようにマルクスは、ユーアの功績として工場外の労働者の悲惨を「ひとときわあざやかに強調した」点をみとめる一方で、ユーアがそれを工場制度と切り離して描いている点を批判している。同じ指摘はすでにエンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』においても行なわれている。そこではこうのべている。

「見よ、工場労働者たちはいい生活をしているのに、これらのあわれな織工たちは、どんなに欠乏に悩まなければならないことか。このような事実を見たうえで、工場制度について判断をくだしたまえ」と。まるで工場制度とその一部をなす機械とは、手織工をこれほどひどく没落させた下手人ではないかのような口ぶりである」(MEW. Bd. 2. S. 366, 372 ページ)。

ユーアはあわせて「綿工場よりも健康と道徳に有害な産業がたくさんある」(p. 336)として、鉱山業の野蛮さにふれている (p. 337)。そして、この部分は、マルクスのノート XX-1269 に引用、抜粋されている。このあとユーアは、児童労働について多くのページをさいて考察し (pp. 350-362)、再び労働組合に言及している (p. 363)。

1) P. Gaskell, *Artisans and Machinery*, 1836, pp. 331-333.

(16) 紡績機械の大型化と工場支配権の確立

ユーアは、紡績機械大型化による、工場主の工場支配権確立についてつぎのようにのべている。

「多くのいさかいが年中くりかえされて、一般市場における商品価格の低下と比例しての賃銀の低下は起りえないことが工場主にはわかった。そして工場主は、労働者が行儀よくて反対できない方法にたよった。なぜなら、この方法は個々の精紡工の賃銀を直接に高めるか、あるいは少なくとも維持するという傾向をもっていたからである。しかし同じ仕事量に必要な(労働者)数は減らすので、その結果、雇われているものはさかえるが、全体は貧乏になるのである」(同) (p. 364)。「収入のどんな増加も職工に対してぜいたくな習慣をより完全に満足させるので、職工は追加的な報酬(報酬の増大)を求めて、大型化したミュール機で追加仕事(ミュール紡績機の仲

長によるいくぶんかの労働の増加)をひきうけることを決して拒否しない」(㉔)(pp. 364~365)。「組合の命令によってつくられた精紡機を拡大するこの必要性は、最近、機械科学に対して大変な刺激を与えた。……ミュール紡績機の大きさを二倍にして所有者は冷淡な(無能な)反抗的な精紡工からのがれる(解雇する)ことができる。そしてもう一度、彼の工場の支配者となった。これは小さな利益ではない(大きな利益である)」(㉕)(p. 365)。

ユーアは、資本家と労働者との争いのなかで生まれた、紡績機械の大型化について、きわめて興味ある分析を行なっている。マルクスは『1861~1863年草稿』ノート XX-1266 において評註ぬきで㉔㉕部分を引用、抜粋し、ノート V-207 で、㉔㉕部分を引用、抜粋している。

(17) 労働者の反抗と「鉄人」の発明

ユーアはひきつづいて、労働者の反抗と機械の発明について、自動ミュール紡績機「鉄人」を例にとつてのべている。

「高い賃銀は、感謝の念と精神修養とをもたらすかわりに、多くの場合に、ごうまん不遜を生み、またランカシャー、ラナクシャーのいくつかの地域の多数の工場主をつぎつぎにまったくほしいままになやましたストライキ(反乱)のさいに、反抗精神を援助するための資金を調達させた。この種の不幸な騒ぎがハイド、スティリーブリッジ、その周辺の工場の町村で起きたときに、その資本家たちは、フランスやベルギーや合衆国に市場から駆逐されることを(彼らの産業が避難することを)おそれ、マンチェスターの有名なシャープ会社の機械技師にそのパートナーのロバーツ氏³⁾に対して、不愉快な奴隷状態とさしせまった破壊から産業を救うためにその発明の才能を自動ミュール紡績機の組立てに傾注してほしいと嘆願した」(㉖)(pp. 366-367)。「こうして、職工がその機械に名づけたように、鉄人は、ミネルヴァの神の命令で、わが現代のプロメテウスの手からつくり出された——勤労階級のあいだに秩序を回復し、大ブリテンを技術(綿工業)の帝国として確保する使命をおびた創造物である。このヘラクレス(紡績機——フランス語版のみ)の奇跡(誕生)のニュースは、組合中に狼狽を広げた。その揺籃を脱する前においてさえ、いわば無秩序(反乱)という怪蛇をしめころした」(㉗)(p. 367)。「この発明は、すでにのべた偉大な見解、すなわち資本が科学をしたがえるときにはいつでも勤労の反逆的な働き手は従順を学ぶということを証明している」(㉘)(p. 368)。

以上の部分は、資本による科学と技術の利用を典型的に示しているものとしてよく引用されている。まずエンゲルス『イギリスにおける労働者階級の

状態』は、ストライキに関連して、ユーアのさきの叙述を要約引用している (MEW. Bd. 2. S. 440, 458 ページ)。マルクスは、『1861～1863 年草稿』ノート V-207 で、㊸㊹ 部分を抜粋して、「ストライキ等々に対抗する、賃銀引き上げの要求に対抗する、機械の発明と充用」(MEGA. II. 3.1. S. 314, 549-550 ページ) として引用している。さらにノート XX-1263 で、㊹ 部分を引用して、「資本主義的生産がはじめて、物質的生産過程を科学の生産への応用——実地に適用された科学——にかえるのであるが、資本主義的生産はそれを、ただ、労働を資本に従属させ、労働者自身の精神のおよび職業的発達を圧迫することによってのみ行なうのである」(стр. 559, 271-272 ページ) とのべている。『資本論』は第 1 巻第 13 章第 5 節「労働者と機械との闘争」において、「機械は、資本の専制に反抗する周期的な労働者の反逆、ストライキなどを打ち倒すための最も強力な武器になる」(MEW. Bd. 23. S. 459, 570 ページ) として、㊸㊹ 部分を引用している。

- 1) ロシア語版『マルクス・エンゲルス全集』第 2 版第 47 巻注 108 は、この自動ミール機について、「1825 年にイギリスの技師リチャード・ロバートソンによって発明された」(стр. 623, 傍点は引用者) としているけれども、正しくは、R. ロバート (Richard Roberts, 1789-1864) が、第 1 の特許を 1825 年に、第 2 の特許を 1830 年にとっている (W. English, *The Textile Industry*, London, Longmans, 1969, p. 178)。

(18) 更紗捺染機械その他の発明

ユーアは同じ事例を、五色更紗捺染機械、染色濯^{すすぎ}自動装置、縦糸糊付機械の発明についてのべている。

(五色更紗捺染機械)「作業している捺染工は、エジプトの工事監督の心意気でもって (古代エジプトの国家事業の首領のように) 仕事にゆるされる徒弟の数と質、彼ら自身の労働時間、払われるべき賃銀を製造業者に命令した。とうとう、資本家は、科学の力によって、このたえがたい束縛からのがれようとし、正当な支配、身体その他器官に対する頭の支配をすみやかに回復した」(㊸) (p. 369)。(染色濯自動装置)「同じ専制的な同盟の強い圧力のもとで発明された」(㊹) (p. 369)。(縦糸糊付機械)「連合した不満分子は、古い労働の分割の戦線 (のうしろに身をかくして——フランス語

版のみ)によってかたく守られることを夢想したが、機械(機械製作者)の新しい戦術によって、彼らの側面がひっくりかえされ、彼らの守りが無用になり、無条件降伏せざるをえないことがわかった」(㉔)(p. 370)。「このような乱暴な反逆は、近視眼的な(最も見さげはてた)人間が、自虐的な(自分で自分の死刑執行人となる)浅ましい性格であることを示している」(㉕)(p. 370)。「もし彼が彼の肉体的機能をその野蛮な苦勞から解放し、彼の知力に、その不滅の利益を考えるひまを与える、神意にそった進歩の方向に静かにすすむならば、彼の運命は何とちがったものになったであろう!」(㉖)(p. 370)。

この部分はひきつづき、エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』が引用している。そして、マルクスもさきのノート V-207 で、㉔㉕部分を引用し、ノート XX-1264, 1265 で、㉔㉕㉖㉗部分を引用して、「科学は作業場の頭であるという資本の『正当な権利』を資本に対して保証し、労働者たちを頭と意志を欠いた作業場の手足に格下げするのだ」(crp. 559, 271 ページ)という証明をユーアは行なっているとのべている。また『資本論』では前項にひきつづいて、㉔部分を引用し、さらにユーアの「無思想な矛盾」を示すものとして、「機械の急速な発達が労働者にとってどんなに有利であるかを長々と説教したあとで、彼は労働者たちに向かって、労働者は自分の反抗的態度やストライキなどによって自分で機械の発達を速めるのだということを警告している」(MEW. Bd. 23. S. 460, 572 ページ¹⁾)とのべ、㉕㉖部分を引用している。前項とあわせて、マルクスはユーアが、労働者の反抗に対抗するために発明された機械と、それを「資本が科学をしたがえ」て労働者を圧迫するものとみていた点を非常に注目しつつ、他方でユーアが「弁護論」的立場から「無思想な矛盾」を示していることをみてとっている。

- 1) なお、『資本論』の当該箇所注 212 で㉕部分の出典を、475 ページとしているのは、370 ページの誤りである。

(19) 1833 年工場法について

第 3 巻第 3 章「工場における知識(教育)と宗教の状態について」は、1833 年工場法における児童労働の規定を中心にあつがっている。1833 年の工場法は、九歳未満の児童を就業禁止とし、一一歳未満を週四八時間(一日最高九

時間)に制限し、1835年3月1日からは一二歳未満に、さらに1836年3月1日からは一三歳未満にその制限がひろげられることになった。そして、一四歳未満の児童に一日二時間の学校出席を義務づけた(p. 358)。ユアはこれを批判してこうのべる。

「工場主は、……一二歳未満の全ての児童を解雇する以外の選択はなかった。……児童は軽い利益のあがる労働から解放されて、議会によって約束された教育をうけるかわりに、何も得ることはなかった。児童はあたたかい(快適な)紡績室から冷たい社会に投げ出され、こじきや浮浪者となって怠惰で墮落している。これは、工場とその日曜学校の以前の改善された状態と対照的なひどい生活である」(p. 406)。

ユアは、1835年3月1日から、週四八時間の制限をうける一二歳未満の児童を問題にして、これを「解雇する以外」ないとし、さらに、「あたたかい紡績室から冷たい社会に投げ出され浮浪者となる」と描き出した。ユアが「一二歳未満の児童を解雇せざるをえない」としているのはそれなりの根拠があった。1833年法で、週四八時間、一日最高九時間と制限された児童を、通常一二時間労働の成人労働者は手伝いとして使用していた。両者の労働時間の差をいかにうめるかが問題となった。これに対して、多数の工場主がとった道は、週四八時間に制限された児童を解雇し、それによって中断されることなしに工場を一日中必要なだけ操業し、かつ面倒な教育条項の負担を免がれるという二つの利益を追求することであったという¹⁾。

さて、さきのユアの叙述に対して、エンゲルスは、「ユア氏の厚顔無恥なことばは、もしそれがあまりにも滑稽至極なものでなかったならば、もっとしゃくにさわったことであろう」(MEW. Bd. 2. S. 393, 404ページ)とのべ、マルクスは『資本論』第1巻第7章「剰余価値率」で、「アンドリュー・ユア博士は、工場の児童や一八歳未満の少年が暖かく澄んでいる作業室の道徳的空気のなかにまる一二時間閉じ込めておかれないで、『一時間』早く冷たく濁った外界に追い出されると、怠惰や悪習のために彼らの魂の救いを奪われるということを証明した」(MEW. Bd. 23. S. 241, 296ページ、註32a)としている。マルクスの場合、1833年工場法の規定について多少不正確なところがあるが、ここではユアをシーニアと同類の人間として位置づけている。

- 1) M. M. Thomas, *The Early Factory Legislation* (London, The Thames Bank Publishing Com. 1948) p. 83. 戸塚秀夫『イギリス工場法成立史論』未來社, 1966年, 340ページ参照。なお, E. Baines, *History of the Cotton Manufacture*, 1835, p. 479 もユアに先だち同じ指摘を行なっている。

(20) 工場児童の教育について

ユア自身は、工場児童の教育について、つぎのように考えていた。

「この王国の全ての地域でとくに工場地区で、一〇歳、一歳未満の貧者の児童に良い教育をあたえる国家にとっての重要な意義はつぎの考察から明らかである。製造業は、当然、狭い地域に多くの住民を濃縮させる。これは、労働者のあいだに秘密の陰謀や協同組合のあらゆる機会をあたえる。これは知力とエネルギーを、一般民衆の心に伝える。十分な賃金は、闘争の資金力を供給する。そして反抗の精神は一般的となる。彼らの情熱をもえたせ、(最低の種類の肉体的放縱によって——フランス語版なし)その欲求を悪化させる多くの手段がある。人間は道德的・宗教的訓育を受けなければ人間の悪い性向によって、必然的に偏見とどん欲の奴隷となる。彼らはものをただ一面からみることしかできない。……彼らはすぐに抜け目のない煽動者に誘惑され、彼らの最良の恩人である彼らを雇っている、企業心にとむ、質素な資本家を、偏見とねたみの目でみる(侮辱を犯す——フランス語版のみ)のである」(p. 407)。

こうしてユアは、資本家に対し「偏見」をもたせないための道德的・宗教的訓育の必要をとき、その例として日曜学校をあげている。

(21) 第4巻「工場制度の商業的経済論」

ユアは第4巻「工場制度の商業的経済論」において、「商業、資本、信用の現状、諸国民の産業に対する自由貿易、制限貿易の影響」を考察し、中心を自由貿易問題においている。ユアは、「原料価格の低下が機械の改善に加わって、製造品の価格低下の原因となる」(p. 442)として、自由貿易の立場を展開していく。そこで注目されるのは、製品価格の低下のために、規模を大きくして節約することが過剰生産をまねき、その分を輸出にまわして外国市場を制覇していく傾向を指摘している部分である(p. 443)。この部分は、マルクス『1861～1863年草稿』ノート XIII-707 (MEW. Bd. 26. II. S. 498-S. 499, 『剰余価値学説史』第II部) 672ページ)で言及されて、「ユアやコベットのなどは国内に関するかぎり、過剰生産は大工業の常態であり、したがって過

剰生産は、対外市場もまた収縮するような特定の状況のもとでだけ恐慌を引き起こすのだ、と説いている」とのべている。

VI. 総 括

マルクスは、ユーアの総体的評価として、「工場制度にかんする最良のもの」(『1861～1863年草稿』ノート XX-1245, ctp. 517, 213 ページ)、「工場制度の神髄をはじめて正確に把握し、自動作業場」(ノート XX-1241, ctp. 512, 203 ページ)の本質をとらえたとし、「公的な人物のうちでは実際にユーアが工場制度の精神を、一般に現代の工業をいちばん正しくいいあらわしている」(ノート XX-1263, ctp. 556, 267 ページ)と積極面をみとめている。しかし他方で、「工場制度の内部にとらわれたしもべ」(ノート XX-1245, ctp. 517, 213 ページ)、「工場制度の破廉恥な弁護者」(ノート XIX-1241, ctp. 512, 203 ページ)、「無制限労働日の弁明書」(MEW. Bd. 23. S. 461, 572 ページ)、「経済学上のブルジョアジーの御用代弁者」(MEW. Bd. 16. S. 110 [『賃銀・価格・利潤』106 ページ])とのべ、ユーアの階級的基盤とその「弁護論」的性格をおさえている。その「弁護論」的性格は、くわしくみてきたように、「児童労働」や「工場法」などに典型的に示されているといえよう。しかしそのことによって、ユーアが機械制大工業の本質把握に貢献したものを見失ってはならないであろう。

マルクスが、ユーア『製造業の原理』から批判的に摂取した点を順に整理すれば、以下の如くである。

- ① ユーアは工場労働と対比して、工場外労働の悲惨さをあざやかに強調した。この点をマルクスは評価すると同時に、ユーアがこれを工場制度の一産物として位置づけていない点を批判した。
- ② ユーアは工場制度の概念について、「生産機械の一つの体系」のもとにおける「多くの等級の結合された作業」と、一つの中心動力によって動かされる「巨大な自動装置」という考えを強調した。マルクスもこれを重視し、労働者自身が機械のたんなる「知的器官」としてあらわれる点に注目した。と同時に、ユーアが機械とその資本主義的充用とを区別

していない点を批判し、「労働の緩和」された工場（ユーア）も「責め苦の手段」となるとした。

- ③ ユーアは蒸気機関の力によって工場主の意図がつかぬけることを強調し、マルクスも工場における専制君主として蒸気機関を位置づけた。
- ④ ユーアは、R. アークライトが工場法典をつくったことをたたえた。これをマルクスは皮肉をこめて批判し、「工場の兵營的規律」の本質をなすものとして指摘した。
- ⑤ ユーアは、機械改善の「傾向」と「不変の目的」として、「成人男子労働者の代わりに、婦人・児童労働を用いる」点と、「自動体系では、労働者の才能はますます排除される」傾向とを指摘した。マルクスはこれを機械の資本主義的充用の本質についているものとして評価した。
- ⑥ マルクスは、ユーアの等級制と労務平等分配制度の見解に注目し、「労働の均等化、水平化の傾向」を主張するさいの一つの根拠としている。
- ⑦ マルクスは、ユーアの、自動工場における分業の特質としての労務平等分配制度の見解をもとに、マニュファクチュア的分業廃棄の技術的基礎を分析した。同時に、ユーアが古い分業体系が再生産され、確立される点を無視していることを批判した。
- ⑧ ユーアは機械を三種に分類した。これはマルクスによる「発達した機械」の三つの部分という規定の原型をなしていると推定される
- ⑨ ユーアは「製造業の原理」が動力の節約によく示されているとし、馬の使用と対比しての蒸気機関による動力の節約を強調し、これを国民経済のなかに位置づけ分析した。マルクスもこれを大工業による「動力の節約」として評価した。
- ⑩ 同じくユーアは、伝導機構の改良に「製造業の原理」がみられるとし、これを分析した。マルクスも「伝導機構における節約」としてこれを評価した。
- ⑪ ユーアは、自動機械による機械製造の重要性を強調し、機械の精密さ

の増大、機械製作の速度増大、機械の低廉化としてこれを分析した。マルクスもこれを重視して「作業機における節約」として位置づけるとともに、資本蓄積論、「資本の有機的構成の高度化」論、「不変資本充用上の節約」論の素材とした。

- ⑫ ユーアは、ストライキの結果としての自動機械を多数の事例をあげ分析し、マルクスもそれを資本による科学と技術の充用として位置づけた。同時にユーアが、組合はストライキによって自動機械の採用をはやめたという一方で、組合がなければ自動機械の採用はもっとはやまり、労働者に有益になったという矛盾した論理を展開している点を資本家的な「無思想な矛盾」の典型として批判した。
- ⑬ ユーアは、工場主の機械科学に対する相対的無知をみとめ、工場主に對してこれを独自に学習する必要をといた。マルクスは、ユーアの記述から、資本の科学に対する利用態度、資本家と産業管理者との相違などをみてとった。
- ⑭ ユーアは、工場労働の特質として、すぎなときに仕事を止めるという古い特権を放棄しなければならないという一方で、ストライキがなければ工場制度はもっと急速に発展したであろうという論理を展開する。そして、労働者に対して、工場の支配人・協同出資者になる以外にすくわれる道はないとき、これが「労働に対する需要を増大させる」というなぐさめをいう。これに対してマルクスは、ユーアの叙述に、「機械は労働者に労働の連続性を押しつける」ことをよみとり、さらにさきの矛盾をえぐり出すとともに、工場制度の特徴としての労働の「反撥と誘引」をみい出している。
- ⑮ ユーアはストライキの「有害さ」を示す例として、機械の休止による機械への損害をのべている。マルクスはこれを「機械の非使用から生じる」物質的損耗の一種として位置づけた。
- ⑯ ユーアは一連の工場法が労働者の「騒動、不満、反抗」の結果生まれたことをみとめている。この点をマルクスは工場主側からの評価として

注目している。

- ①⑦ ユーアは、労働者の「課業の最低限」について指摘し、また機械改良の効果として、成人・熟練労働を排除する傾向、賃銀を引き下げる傾向をみとめている。マルクスはこの点を評価しつつ、ユーアの「弁護論」的部分を批判している。
- ①⑧ ユーアは、紡績と織布の兼営工場の優位性を強調し分析した。マルクスの結合工場についての統計分析は、これに示唆されたものであると推定される。
- ①⑨ ユーアは、自由貿易論の立場から、製品価格の低下のために、規模を大きくし節約することが過剰生産をまねき、その分を輸出にまわして外国市場を制覇していく大工業の傾向を指摘した。マルクスは、「国内に關するかぎり過剰生産は大工業の常態である」という説として注目している。